

愛知医療学院大学紀要

第1号

Bulletin of AICHI Medical College of Rehabilitation

巻頭言

愛知医療学院大学 学長
横尾 和久

本学では短期大学紀要をこれまでに 15 巻発行して参りました。大学紀要と名を改め第 1 巻となる今号は、本学が 2024 年 4 月に四年制大学に移行してから初めて発行する紀要になります。

超高齢社会を迎えた我が国において、リハビリテーション医療を取り巻く環境は大きく変わりつつあります。従来は、疾病や傷病の回復期から開始するリハビリテーションが中心でしたが、近年では、急性期・超急性期から開始するリハビリテーションの有効性が実証されつつあります。本学でも医科大学や急性期病院との連携をこれまで以上に深めて、この分野での研究にも取り組んでいきたいと思ひます。

もうひとつ今後のリハビリテーション医療の重要な柱となると考えられるのが、予防医学の分野への進出です。本学では、これまでも清須市との官学連携事業として地域在住の高齢者を対象とした「清須げんき大学」を運営して参りました。参加者の健康意識の向上、地域社会への参画推進に成果を挙げてきたと考えます。要介護状態の予防や認知症発症予防にも効果があるものと推察いたします。今号の紀要でも、「清須げんき大学」参加者の背景や健康意識の変化を分析した論文が掲載されており、嬉しく思ひます。理学療法士・作業療法士が、今後予防医療の分野で主要な役割を担って行くことは間違いありません。本学としても、一層研究に取り組んでいきたいと思ひます。

令和 7 年 3 月吉日

目 次

卷頭言

[原著]

- 高齢者大学参加者の背景と参加後の意識変化 3
濱田 光佑, 清水 一輝, 寺村 晃, 臼井 晴信, 加藤 真弓

[短報]

- 医療機関で働く作業療法士が感じる作業療法実践の困難さ 13
清水 一輝

- 高齢者は馴染みのない作業に取り組むとき模様や色をどのように選択し
どのような思いを込めるのか 21
加藤 真夕美, 外倉 由之, 清水 一輝

- 小学生における姿勢の現状と姿勢改善を目的とした
講義前後の即時的な変化 29
齊藤 誠

[活動報告等]

- 大学生の小児領域の正課外活動に対する支援の報告と今後の課題 37
藤本 大介, 加藤 真弓, 浅野 育子

[学生研究]

- 卒業研究論文 第15巻 令和六年度 49

[投稿規定]

- 愛知医療学院大学 紀要投稿規定 53

編集後記

[原著]

高齢者大学参加者の背景と参加後の意識変化

濱田 光佑¹⁾ 清水 一輝²⁾ 寺村 晃³⁾ 臼井 晴信⁴⁾ 加藤 真弓⁴⁾

- 1)愛知医療学院短期大学 リハビリテーション学科 理学療法学専攻
- 2)愛知医療学院短期大学 リハビリテーション学科 作業療法学専攻
- 3)大阪保健医療大学 保健医療学部 作業療法学専攻
- 4)愛知医療学院大学 リハビリテーション学部 リハビリテーション学科 理学療法学専攻

Motivations and Impacts of Lifelong Learners Enrolling in a Healthcare College for Senior Citizens

Hamada Kosuke Shimizu Kazuki Teramura Akira
Usui Harunobu Kato Mayumi

【要旨】

愛知県清須市で実施されている清須市民げんき大学の参加者への記述式アンケートから、地域在住高齢者が高齢者大学への入学に至った背景と、その経験が及ぼす影響を明らかにすることを目的とした。対象は2020～2023年度までの記述式アンケート82件とし、高齢者大学への期待、入学時、卒業時の目標の3項目を集計した上で、各項目に対しKH CoderによるText miningを行った。分析の結果、地域在住高齢者は加齢に伴う環境と役割の変化から入学を決意し、高齢者大学の経験は対象者のエンパワメントを引き出し、同時に健康行動の促進と学びの成果を地域活動へ活かすことへと繋がった。

キーワード：清須市民げんき大学 高齢者 Text mining

【はじめに】

我が国が超高齢社会を迎える中、高齢者が自分らしい生活を送りながら人生を全うすることの重要性は高まっている。近年は、そのような観点から高齢者の生涯学習の在り方が着目されており、各自治体ではいわゆる高齢者大学が設置されていることも少なくない。

愛知県清須市においても、医療系大学が主体となり官学一体となって清須市民げんき大学（以下、げんき大学）を設立し、いわゆる高齢者大学として介護予防事業を実施している。げんき大学では高齢者の健康や介護予防に関する知識を広げ、運動等を通じて健康づくりを進めるとともに、新しい出会いや発見、感動を分かち合うことが目標とされている¹⁾。また、運営の主体が医療系大学ということもあり、そのカリキュラムは対象者の健康増進に特化していることが特色である。

高齢者大学の医療福祉領域に関する研究は、その事業効果を定量的に解析したものや事業の成果をアンケート結果として示したものが中心となっており、記述式アンケートといった定性的データを定量的に分析するいわゆる混合研究法を行っている研究は限定されて

いる。さらに、対象者がなぜ高齢者大学へ入学しようとしたのか、その結果、対象者へどのような心理的影響を与えたのかは十分に検討されていない。

そこで本研究では、げんき大学の卒業生を対象に、げんき大学へ入学するに至った理由、げんき大学を通じて対象者の主観的体験が及ぼす意識変化について、対象者への記述式アンケートの Text mining によって明らかにする。

【目的】

本研究の目的は、げんき大学の参加者の入学時、卒業時のそれぞれの記述式アンケートの結果から、げんき大学への期待、入学時の目標、卒業後の目標の形態素ごとの傾向を明らかにすることである。その上で、げんき大学の経験が参加者の意識変化に与える影響を明らかにする。

【対象と方法】

1. 清須市民げんき大学の概要

げんき大学は単年度の事業であり、清須市からの広報によって地域住民に周知され入学希望者を募集している。毎年 20～25 名の卒業生を輩出しており、第 7 期生までの卒業生は 165 名（2024 年 11 月時点）となっている。げんき大学の参加者は、清須市に在住する概ね 65 歳以上の高齢者となっており、介護予防に対して学習意欲を持ち卒業後も地域活動に参加する意欲がある者を対象としている。げんき大学で実際に講座を担当する講師は、市職員、社会福祉協議会職員、医師、歯科医師、理学療法士、作業療法士、管理栄養士で構成されている。その中でもげんき大学自体が介護予防事業として運動や知識の向上に重きを置いていることから、特に理学療法士や作業療法士との関わりが多く、医療系大学の大学生も授業の一環として参画している。げんき大学は計 16 日開講されており、その頻度は 1～2 回/月である。1 限当たり 60 分を基本とした計 2 時間の座学講義と体操やスポーツ、レクリエーション等の身体活動と他者との交流を伴う講座を実施している（表 1）。

表 1. げんき大学で実施される全講義日程（2024年度）

	1 限目（60 分）	2 限目（60 分）
第 1 回	入学式	
第 2 回	体力・認知機能測定	
第 3 回	地域包括ケアシステムについて	体力測定結果の返却
第 4 回	地域ボランティアについて	げんき体操（ストレッチ）
第 5 回	介護予防と社会参加について	げんき体操（筋力トレーニング）
第 6 回	ロコモティブシンドロームについて	げんき体操（ウォーキング）
第 7 回	余暇活動について	高齢者主体の学生向けレクリエーション
第 8 回	心臓病・脳卒中について	ボッチャ体験/げんき体操
第 9 回	革細工作成体験	高齢者主体の学生向けレクリエーション
第 10 回	認知症予防について	コグニサイズ/げんき体操
第 11 回	アンチエイジングについて	コグニサイズ/げんき体操
第 12 回	口腔・嚥下と介護予防について	フライングディスク体験/げんき体操
第 13 回	食事・栄養について	ボランティア演習/げんき体操
第 14 回	ストレスについて	ボランティア演習/げんき体操
第 15 回	体力・認知機能測定	
第 16 回	卒業式	

2. 対象

対象者は、筆者が当事業に参画した 2020 年度から 2023 年度までの清須市民げんき大学の卒業生 94 名である。なお、卒業生 94 名は同期間の全入学者と一致する。対象者には、入学時、卒業時に自身の個人目標に関連する記述式アンケートを実施した。

3. データ収集

個人目標に関する記述式アンケートは入学時と卒業時の計 2 回実施され、入学時アンケートとして、1. げんき大学で学びたいこと：大学での目標（以下、げんき大学への期待）、2. 1 年後どのようになっていたいか（以下、入学時の目標）を実施した。同様に卒業時アンケートとして、3. 目標：今後の私（以下、卒業時の目標）を実施した。

また、本研究では、回収された記述式アンケートのうち記載漏れがあった 12 名分を除いた 82 名分のアンケートを分析対象とした。なお、本研究は愛知医療学院短期大学倫理委員会からの承認を受けて実施した（承認番号：20010, 21023, 24014, 24011）。

4. 分析方法

入学時アンケート（1. げんき大学への期待、2. 入学時の目標）、卒業時アンケート（3. 卒業時の目標）のそれぞれに対して、KH Coder（株式会社 SCREEN アドバンスドシステムソリューションズ, Ver.3 Base）による Text mining を行った^{2,3)}。KH Coder のシステム上、語句は形態素で抽出されるため、複数の形態素から構成される語句は強制抽出する語句として定義した。強制抽出語句としては、「げんき大学」を指定した。また、卒業時アンケートの解析のみ「筋トレ」、「脳トレ」を加えて指定した。KH Coder の分析条件として、入学時アンケート（1. げんき大学への期待、2. 入学時の目標）に関しては、抽出語の最小出現回数を 5 回、集計単位数を段落とし、共起関係の算出には Jaccard 係数 0.2 以上を条件とした。また、卒業時アンケート（3. 卒業時の目標）に関しては、共起ネットワーク分析のグループ数を調整するため集計単位のみを文とした。

【結果】

1. 抽出語句

Text mining の対象である 1. げんき大学への期待に対し、語の取捨選択を設定し前処理を行ったところ、総抽出語数 4,187 語句、異なり語数 918 語句が抽出された。同様の手続きを実施した結果、2. 入学時の目標の総抽出語数 2,785 語句、異なり語数 621 語句、3. 卒業時の目標の総抽出語数 6,147 語句、異なり語数 1,221 語句が抽出された。

2. 共起ネットワーク分析

各アンケートの結果に対しテキストの傾向を探るために共起ネットワーク（サブグラフ検出：random walks）分析を実施した。その結果、げんき大学への期待からは 9 グループ、入学時の目標からは 6 グループ、卒業時の目標からは 13 グループが抽出された。各グループを形成する語句については、コンコードダンスを参照し内容を確認した上で、それぞれのグループにネーミングを行った（図 1, 2, 3）。

げんき大学への期待の 9 グループの名称は、【今後の人生の指標】、【自己の振り返り】、

【健康維持への取り組み】、【健康的な生活】、【地域活動への参加】、【生きがいの探求】、【親族を投影した不安】、【認知症予防】、【歳月の経過】とした。

入学時の目標の6グループの名称は、【地域活動のための知識】、【運動を通じた良好な人間関係】、【今より元気な自分】、【新たな仲間】、【楽しい生活】、【心身の健康】とした。

卒業時の目標の13グループの名称は、【関係者への感謝】、【げんき体操の継続】、【健康的な食事】、【講義の受講】、【経験を生かす術の思考】、【趣味としての地域ボランティア】、【転換点としてのげんき大学】、【運動教室への参加】、【げんき大学での学び】、【豊かな老年】、【認知症予防】、【運動の継続】、【運動の内容】とした。

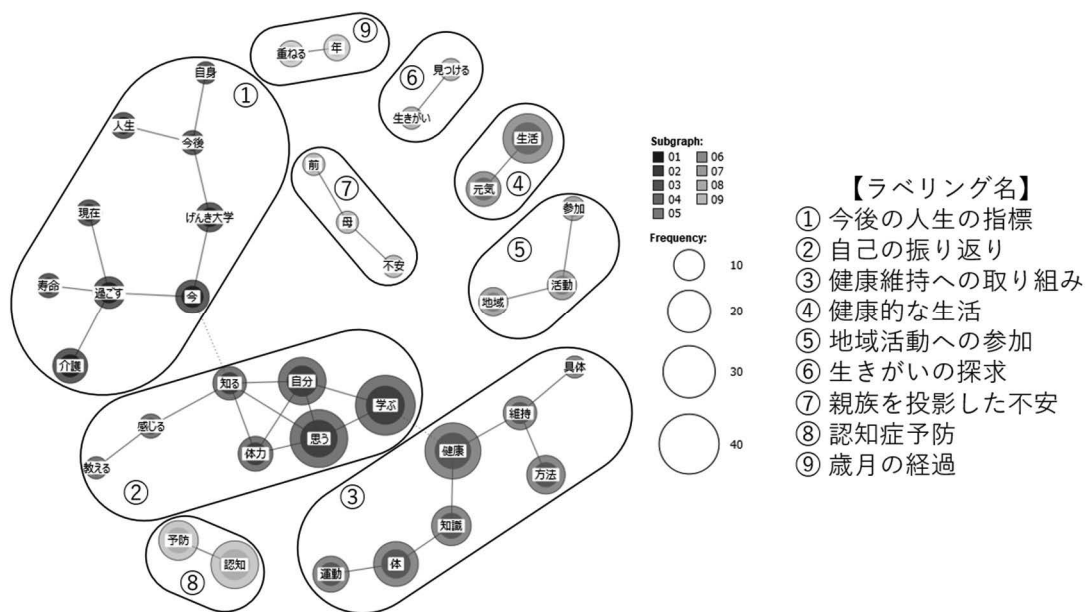


図1. 共起ネットワーク - げんき大学への期待 (サブグラフ検出: random walks)

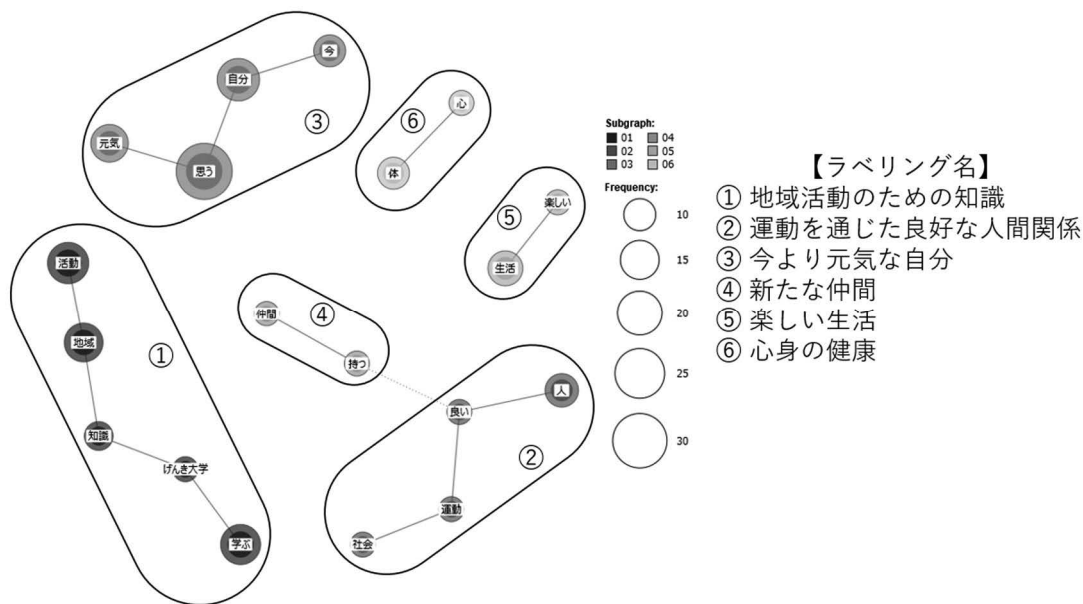


図2. 共起ネットワーク - 入学時の目標 (サブグラフ検出: random walks)

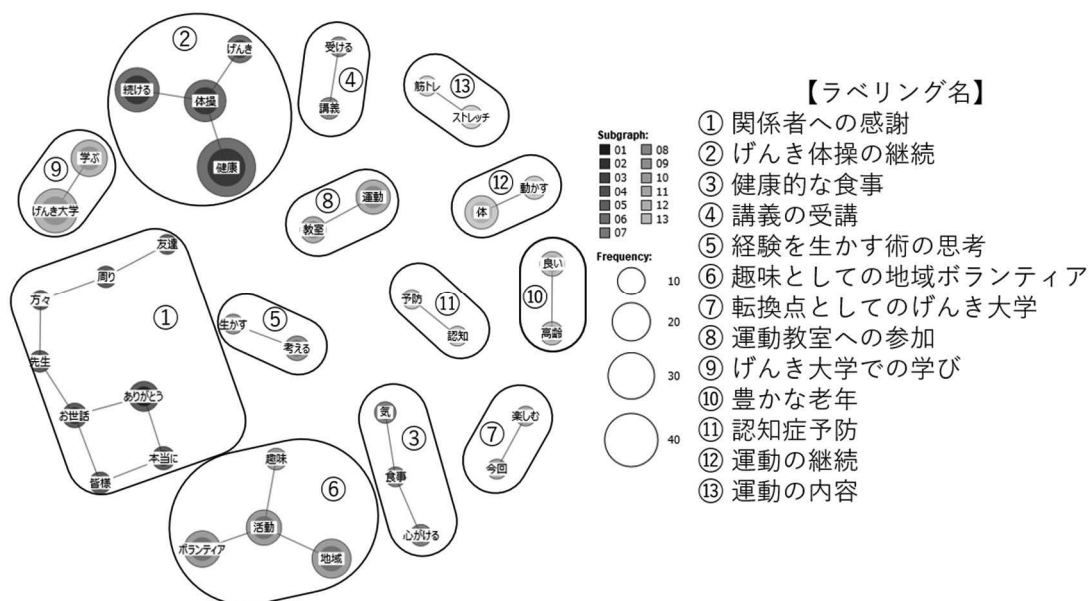


図3. 共起ネットワーク - 卒業時の目標 (サブグラフ検出: random walks)

【考察】

1. 参加者の入学背景とげんき大学に求めるもの

高齢者大学は、主に市区町村などの基礎自治体を実施する高齢者向けの生涯学習事業であり、市民大学の一種である⁴⁾。本研究においては、より具体的にするため先行研究に従い、高齢者大学を主として高齢者を対象とした行政が配置する学校教育法で定める学校以外の「学校」、「大学」と定義して議論を進めたい⁵⁾。各地域それぞれで運営されている高齢者大学では、高齢者の生涯学習の機会を多種多様な活動によって提供している。福井ら⁵⁾は東京都特別区における9つの高齢者大学を調査し、高齢者大学の目的として「生きがい」や「つながり」が共通して重視されていることが指摘されている。

また、高齢者大学に関する医療福祉領域における知見として、生涯学習に取り組んでいる高齢者の主観的健康観が高いこと⁶⁾、非参加者と比較し参加者は自覚的健康度が有意に高く社会への貢献意識や若年世代との交流意欲が高いことなどが示されている⁷⁾。さらに、日本の高齢者大学と同様のヨーロッパ諸国を中心に高齢者の生涯学習、社会教育に携わる **Universities of The Third Age** と呼ばれる第三期大学の受講者研究においては、参加者の生きがい感を向上させ、健康づくりの場にもなっていることが数多く指摘されている⁸⁻¹⁰⁾。これらの先行研究が示す通り、高齢者を対象とした生涯学習事業の目的や効果には生きがいづくりが重視されていることが理解され、げんき大学と共通している。

げんき大学への期待からは、地域在住高齢者のげんき大学の入学に至るまでの社会的背景が抽出された。同項目の【今後の人生の指標】、【自己の振り返り】、【生きがいの探求】、【親族を投影した不安】、【歳月の経過】といったグループからは、対象者自身と対象者を取り巻く環境の変化の様子が示されている。対象者は加齢による心身の退行性変化や高齢期特有のライフイベントを経験する事によって、自分自身の生について内省し現在地からの人生の道標を模索している。特に両親や配偶者といった人生を長く伴走してきた近親者

との死別や心身の衰えといった変化を目の当たりにし、その姿を自らに投影することで自身の健康状態や生き方を問い直している様子が示されている。そのような自身の人生を振り返り、家庭や社会の中での新たな役割を模索する転換点として、げんき大学の入学を選択したことが推察される。もしくは、そのような変化を受け入れた上で自己成長のための前向きな選択としてげんき大学への入学を行っている。また、同項目における、【健康維持への取り組み】、【健康的な生活】、【認知症予防】、【地域活動への参加】のグループからは自身の健康状態を維持・向上させることを主として、新たな自身の生きがいの発見を求めるといった内容が示されている。この内容は、入学時の目標から抽出された【地域活動のための知識】、【今より元気な自分】、【楽しい生活】、【心身の健康】とも類似したものである。

一方で、入学時の目標として独自に抽出された内容としては、【運動を通じた良好な人間関係】、【新たな仲間】といったげんき大学への参加による新たな人間関係への期待が挙げられ、当事業の集団活動に形成される人間関係を前向きに捉えていることが理解される。げんき大学では、介護予防の必要性の理解といつまでも健康で過ごすための支援により、地域社会での役割や新たな人間関係の形成等を通じた生きがいつくりの促進といった設立趣旨が掲げられている¹⁰⁾。その点において参加者の目的意識とげんき大学の設立趣旨は一致しており、げんき大学の想定する対象者に、適切に認知され参加意欲を引き出すことができていると考えられる。

2. げんき大学の参加が高齢者にもたらす影響

卒業時の目標からは、対象者がげんき大学で何を学んだのか、また、自身の今後の生活にどのように活用していくのかについて示された。作成された13グループをその記述やコンコードダンスから分類すると、【講義の受講】、【経験を生かす術の思考】、【転換点としてのげんき大学】、【げんき大学での学び】といったげんき大学の学びそのものを肯定するグループ、【げんき体操の継続】、【健康的な食事】、【豊かな老年】、【認知症予防】、【運動の継続】、【運動の内容】といった学習した内容に基づき自身の健康に関する具体的な行動指針を示すグループ、【趣味としての地域ボランティア】、【運動教室への参加】といった地域活動への意欲に関するグループ、【関係者への感謝】を示すグループの4つに大別された。

まず、全体像としては入学時と卒業時のそれぞれの目標は大枠として共通していた。その中心は自身の健康維持・向上のために運動や地域活動への参加といったものである。卒業時の目標においては、その内容が1年間のげんき大学の経験を通じ、入学時の目標と比較しより具体性を持って示されている。特にげんき大学で定着を促している「げんき体操」についてはアンケート上の記載頻度も高く、対象者自身が実施することに加え地域活動で応用するといった内容が認められている。「げんき体操」は同講座の中でも、多くの時間を割き実践する内容となっており、そのことを反映している結果ともいえる。また、認知症予防に関しては、卒業時の目標として改めて抽出されており身体機能の維持向上と同様に参加者の高い関心事項となっていることが理解される。

一方で、卒業時の目標として独自に抽出された内容としては、食事や栄養に関する項目が挙げられる。これは、食事・栄養・口腔機能に関する講義や栄養状態を評価するアンケート等を通じ、個人の健康づくりに欠かすことができないものであるという認識が生じた

結果だと考えられる。また、【経験を生かす術の思考】という記述からは、げんき大学の経験を自分自身や第三者、地域に反映させる意思を表している。【趣味としての地域ボランティア】、【運動教室への参加】といった内容を踏まえると、自己完結型の個人目標がその対象を地域へと拡大し、同時にげんき大学での経験が参加者のエンパワメントを引き出していると解釈することができる。この内容は、高齢者大学での経験が高齢者の地域社会への信頼感を向上させ、個人の社会参加の機会を増加させることを示した先行研究の内容を支持するものである¹¹⁾。また、卒業時の目標はげんき大学への期待や入学時の目標と比較し **Text mining** の総抽出語数が多く、共起ネットワーク上のサブグラフも多く検出されていることから、参加者はげんき大学の活動を通じ自身の健康を維持・向上させるために具体的な手段について学習し、行動指針を定めている状況が推察される。さらには、食事、ボランティア活動、趣味といった卒業時の新たな記述からも、参加者が抱く「健康」という概念そのものを拡張させている可能性もある。

最後に本研究においては、講義内で多く交流を行う「大学生」といったキーワードや高齢者が主体性を持って取り組んだ講義、活動に関連するサブグラフは検出されなかった。これは、げんき大学は構成上、体操の習得や介護予防に関する理解向上に関する受動的な講座が主体となっていることが反映された結果であるともいえる。今後の発展として地域のリーダーを育成していくことを想定するならば、講座や卒後教育等の内容をさらに検討していく必要がある。

3. 研究の課題と限界

本研究の限界について以下の2点を挙げる。まず、本研究で使用された各アンケートは匿名性が担保されていないことである。【関係者への感謝】といった当事業に対する満足度の高さが示された一方で、ネガティブな意見を得ることが難しい状況にあったことは留意しなくてはならない。2点目は、アンケートはげんき大学の入学時と卒業時にそれぞれ実施されたものであるが、げんき大学の開講期間中にも高齢期特有の多様なライフイベントが変数として無数に存在し、抽象性の高い個人目標という質問を取り扱った本研究では当事業以外の影響を受けている可能性を否定できないことが挙げられる。

今後の課題については以下の2点が挙げられる。まず、本研究では取り扱わなかった年代、性別、健康状態等による条件設定の必要性である。上記の条件設定を行っていく事により詳細な分析を行っていく必要がある。2点目は、今回の分析結果はげんき大学参加者の心理的变化に着目したものであるが、この心理的变化が実際の行動変容に繋がったのかは別の調査が必要となる。今後は、これらの点を踏まえ高齢者大学が対象者に与える影響について調査を継続していく。

【謝辞】

清須市民げんき大学に入学された地域在住高齢者の皆さま、また当事業にご尽力いただいている全ての方に深謝いたします。

【文献】

- 1) 愛知医療学院大学. 地域・社会貢献活動-清須市民げんき大学.
<https://amcr.ac.jp/guide/activities/genkidaigaku/> (2024年11月30日参照).
- 2) 牛澤賢治: やってみようテキストマイニング 自由回答アンケートの分析に挑戦!. 朝倉書店, 東京, 2021, pp. 38-73.
- 3) 樋口耕一: 計量テキスト分析および KH Coder の利用状況と展望. 社会学評論. 2017; 68 (3): 334-350.
- 4) 文科省. 資料2 長寿社会における生涯学習のありかたについて (素案).
https://www.mext.go.jp/a_menu/ikusei/koureisha/1317565.htm (2025年1月23日参照).
- 5) 福井弘数: 高齢者大学に関する一考察-東京都特別区における行政における設立する「大学」に着目して-. 教育デザイン研究. 2022; 13 (2): 1-7.
- 6) 久保宣子: 生涯学習に取り組んでいる高齢者の主観的健康感. 八戸学院大学紀要. 2017; 55: 54-59.
- 7) Kondo Takaaki, Sakakibara Hisataka: Characteristics of Participants and Nonparticipants in an Educational Program for Senior Citizens. Japan Society of Nursing and Health Care. 2004; 6 (2): 16-22.
- 8) Cusack SA, Thompson WJA, Rogers ME: Mental Fitness for Life; Assessing the impact of an 8-week mental fitness program on healthy aging. Educational Gerontology. 2003; 29 (5): 393-403.
- 9) Lamb R, Brady EM: Participant in Lifelong Learning Institutes; What turns members on?. Educational Gerontology. 2005; 31 (3): 207-224.
- 10) Hori Shigeo, Cusack SA: Third age education in Canada and Japan; Attitudes toward aging and participation in learning. Educational Gerontology. 2006; 32 (6): 463-481.
- 11) 濱田光佑, 臼井晴信, 寺村晃: 短期大学生との世代間交流を伴う介護予防事業が高齢者に与える影響. 日本世代間交流学会誌. 2023; 12 (2): 13-21.

[短報]

医療機関で働く作業療法士が感じる作業療法実践の困難さ

清水 一輝

愛知医療学院短期大学 リハビリテーション学科 作業療法学専攻

The Challenges in Occupational Therapy Practice Perceived by Occupational Therapists Working in Medical Institutions

Shimizu Kazuki

【要旨】

本研究は、医療機関で働く作業療法士が作業療法実践において感じる実践の困難さを明らかにし、その背景にある医療制度を考察することを目的とした。医療機関で働く2名の作業療法士を対象に半構成的インタビューを実施し、その結果を質的記述的に分析した。分析の結果、「医療制度により受ける制約」「理解されない作業療法の専門性」「応えられない作業ニーズ」という3つのカテゴリーが抽出された。医療制度や医療機関によって求められる役割と作業療法の専門性の不一致、作業療法の専門性が対象者や他職種に十分認識されていないこと、急性期医療において疾患管理が優先されるため作業のニーズに応えられない制約が存在することが示唆された。これらの結果を踏まえ、医療機関における作業療法の枠組みを再構築し、作業療法士の専門性を活かせる環境整備の必要性があると考えられる。

キーワード：作業療法 専門職 チーム医療 質的研究

【はじめに】

我が国では、作業療法士の大半が医療機関で働いており、1965年に作業療法士制度が発足して以来、作業療法士の有資格者数は増加している。2024年9月時点で作業療法士の有資格者は118,471名に達し、そのうち日本作業療法士協会に所属している62,628名の中では、68.7%が病院で勤務している¹⁾。近年、学校作業療法²⁾や司法作業療法³⁾など医療機関以外での作業療法士の職域が拡大しているものの、依然として作業療法士の有資格者の大半が医療機関での作業療法に従事しているのが現状である。

作業療法士の大半が従事している医療機関では、全人的医療の必要性が指摘されている^{4,5,6)}。全人的医療とは、病気だけを見るのではなく、生活している1人の人間として医療を提供していくという考え方⁷⁾であり、これまでにはない新たな医療の展開が求められている。しかし、医療の専門分化が進み、疾患特異的な診療体系が構築される中で、全人的医療の実現が難しい⁷⁾という指摘もあり、全人的医療の十分な実践にまで至っていないといえる。

全人的医療において、作業療法士はその専門性を十分に発揮できる可能性がある。作業療法士は、作業を通じて人々の健康と幸福を実現する専門職である⁸⁾。作業療法士が用い

る作業とは、人が日常で営む生活行為の全てと定義されており、作業は人と環境との相互作用によって引き起こされ、さまざまな状況的要素から切り離せない⁹⁾。つまり、作業療法士が対象者の作業に着目する際には、個人の疾病や障害だけでなく、その背景にある生活全体が治療の対象となる。全人的医療を目指す、生活している1人の人間として提供される医療の中で、作業療法の果たす役割は極めて重要であると考えられる。

しかし、現在の医療機関では作業療法実践の困難さが存在し、作業療法士がその専門性を十分に発揮できていないのが現状である。作業療法実践の困難さには、クライアントや実践環境、セラピストの知識など^{10,11,12)}のさまざまな要因があるとされている。

医療機関における作業療法には様々な困難さが存在するが、それでもなお、多くの作業療法士が従事する医療機関において、作業療法の専門性を発揮できるよう、具体的な実践枠組みを明確にする必要がある。本研究では、これまで十分に解明されていない、医療機関で働く作業療法士が感じる実践の困難さを詳細に明らかにし、その困難さの背景にある医療制度の影響について考察する。

【研究方法】

1. データ収集期間及び研究協力者

データ収集期間は2022年5月から2022年8月までである。研究協力者は医療機関で働く作業療法士で、医療機関での作業療法実践に困難さを感じている者である。本研究では、作業療法士の経験年数や従事している病期などは、包括基準や排除基準に含めていない。対象者は、機縁法を用いて協力を依頼した。

2. データ収集方法

研究依頼は文書を用いて行い、口頭で研究の方法や目的等を説明した。その後、同意が得られた場合に同意書に署名を依頼した。

データ収集は、半構成的インタビューを実施した。研究協力者には、医療機関における作業療法実践の困難さについてインタビューを行い、医療機関での作業療法実践者としての悩みを中心に自由に語ってもらった。インタビューデータは、研究協力者の承諾を得て録音した。

3. データ分析方法

録音したインタビューデータから逐語録を作成し、質的記述的分析¹³⁾をおこなった。逐語録は何度も精読し内容の正確さについて確認した。医療機関での作業療法実践の困難さに関連するテキストを抽出するため、1.作業療法士が実践において困難さを感じた経験、2.医療機関や制度的な要因に関連する発言の2つの基準に基づいてテキストを抽出した。抽出したテキストの意味を考察した上で、テーマを設定した。さらに、設定したテーマの内容を検討し、概念的に類似するものをまとめてカテゴリー化した。分析した結果は、メンバーチェックングとして研究協力者2名に依頼し、抜粋した逐語録とテーマを示し、解釈が本人の意図と合致しているか、内容の適切性について確認を得た。

4. 倫理的配慮

研究協力者には、文書を用いて秘密の保持、匿名性、安全性などについて説明を行った。インタビューを行う場所は、研究協力者の意向を尊重した。本研究は筆者が所属する機関の倫理委員会にて承認（承認番号 22031）を得て実施した。

【結果】

1. 研究協力者の概要

医療機関で働いている作業療法士 2 名に対してインタビューを実施した。A 氏は 20 歳代で急性期総合病院に勤務、B 氏は 30 歳代で回復期リハ病棟に勤務している。

2. インタビュー結果

インタビュー時間は A 氏が 1 時間 4 分、B 氏が 1 時間 15 分であった。医療機関での作業療法実践の困難さに該当する箇所を抽出した。抽出した作業療法実践の困難さは 4 つのテーマとなり、3 つのカテゴリーに分類された。以下、カテゴリーは []、テーマは「」で示す。（）内は補足部分である。

[医療制度により受ける制約]

「医療体制に影響を受ける対象者との関わり方」

診療報酬において定められたリハの単位数や病院の作業療法指示対象者数に基づいた枠組みで実践が行われることで、A 氏が目指す作業療法士としての対象者との関わりを実践する困難さを経験していた。

A：毎日人数多くって、半数ぐらいがそういう（ベッド上安静の）状態の人だと、それぞれの人に対して表出してくれたことに全力で応えたいっていう自分が対象者に向かうパワーもなくなるし。

（中略）

（入院前に）どういうところに（住んで）いてとかそういう内容とかが出てこないんです、人数多過ぎちゃって。背景、この人どういうところで過ごしてた人だっけってなりながら、入っちゃうこともしょっちゅうあって。その人が、どんな人か分からないまま介入しちゃってるときもあって。作業療法士としてはよろしくないなと思ってます。

「求められる成果と作業療法士として重視する支援の不一致」

B 氏は、診療報酬や施設の役割として求められる成果と、個別性を重視する作業療法実践の親和性の低さを感じており、矛盾する役割の不一致を感じている。

B：作業療法が大事にしてることって、もちろんその機能の回復も一つですし、あとは FIM の改善、ADL の改善ももちろんそうなんですけど、そこだけを目指せば全ての患者さん、クライアントの方が健康で幸福になれるかといったら、絶対にそうい

うわけではなくて、必ずやっば個別性の高い支援が必要になるので、そういった病院自体が目的としている機能的な部分にやはりかなり（実践が）引っ張られる。

（中略）

回復期の中で求められるOTの役割があります。どうしてもそこはあって、で、そこは役割っていうのは病院側が求めている役割もあれば、やっぱり、この回復期というシステム自体が持っている役割があると思っていて。診療報酬的に必ずやっばりFIM利得を上げなければいけないし、重症度をある程度保ったまま運営しないと。そういうところを維持しなければ組織自体が維持できないので、そこを維持しないことにはリハビリもないので、それを考えると、それは仕方がない部分ももちろんあるかなと。

（中略）

そういうものも必要なんだなと思ってやってはいますけど。そういうのが逆にいえば、本来やりたい作業療法からは遠ざかることになってしまってる部分もある。

[理解されない作業療法の専門性]

「作業の日常性による専門性の理解しにくさ」

対象者がこれまでの生活で培ってきた経験により、作業療法士が扱う日常生活の中の作業に対して、専門家としての介入の必要性を対象者に理解してもらえないという経験をしていた。

A: OTとしてはやっぱり、（在宅）酸素（療法）をこれから使っても本人さんがやりたいことはやるべきだと思うし、すごくそういう支援したいなって思う気持ちはあるんですけど。本人さんは、入院中に日常生活の指導なんていらんわみたいな、そんなこと長年聞いたから分かつとるわみたいな感じで言われて。全然、その日常生活に対してこちらが関わりたいけどもそれをすごく拒否されてしまう

「求められる多様な役割による専門性の揺らぎ」

リハチームの中で、他職種が作業療法士に求める役割の広さにより、B氏は作業療法士としての専門性が揺らぐという経験をしていた。

B: 何でも屋だと思われているのは、ある意味幸せなのかもしれないですけど、何でも頼られますので結構、それが、仕事多いなと思ったりすることは多いですけど。上肢機能はどうなってるんだ、高次脳機能はどうなってるんだ、この人リハビリ以外の時間は何もやることがないけど何か考えてくれないのかとか、何でもかんでも困ったことが作業療法士に来るなという印象はちょっとあったりはします。

（中略）

作業療法士って生活も、リハビリ以外の時間も。そういう、専門性が広がってきたっていうふうに言っているのかもしれないですけど、そういうことを言われるようにはなりませんでしたね。

〔応えられない作業ニーズ〕

「必要な医学管理により応えられない作業ニーズ」

疾患の治療に対して医学管理が行われている状態の対象者に関して、対象者が表出した作業のニーズに応えられないことにより、A氏は作業療法士としての実践の限界を感じていた。

A: 作業療法士としてはその場で本人さんが困ってるってこととか、今こういうことで困ってるんだよって表出してくれたことに対しては全力で応えたいって思うんですけど、やっぱり医療的な部分で応えてあげられない。

(中略)

生活における困ったことを一緒に考えて解決するっていうのが作業療法だっていう(対象者の)認識を構築する上ですごく大切なことだと思ってるので、その場で表出してくれたことには全力で応えたいけどできないっていうのが、どうしてもそういうのはあるかなと思ってます。

【考察】

1. 医療制度により受ける制約

医療機関での作業療法は、診療報酬点数によって時間的側面の実践枠組みが規定されている。医療サービスの公定価格は診療報酬点数で決定されており、作業療法は1974年に診療報酬点数票に組み入れられた^{14,15)}。その中で、作業療法は対象者に対して20分以上個別療法として訓練を行なった場合にリハビリテーション料の点数が算定できるとされており、診療報酬に基づいて実践が行われる医療機関での作業療法は、その枠組みの中で行われている。

また、急性期病院では、他の病院機能を有する病院群と比較して療法士の数が不足しており、リハ診療患者数が非常に多いと言われている¹⁶⁾。A氏は、「医療体制に影響される対象者との関わり方」に実践の困難さを感じていた。それは、診療報酬で定められた時間的な枠組みの中で、1日の担当患者数の多さにより、自身が目指すべき作業療法士としての適切な支援につながらない経験をしてきたためである。A氏の実践の困難さには、急性期病院の療法士不足や、診療報酬において単位が算定できる時間的な枠組みの中で対象者数が過多になるなど、医療体制の要因が影響していると考えられる。

B氏が作業療法に従事している回復期リハ病棟では、作業療法士としての役割に比べ、回復期リハ病棟のリハスタッフとしての役割がより強調される傾向にあると言える。回復期リハ病棟制度は、集中的なりハ医療を提供するために2000年に始まった制度であり、回復期のリハは障害されたADL (Activities of Daily Living; 日常生活動作) 及びQOL (Quality of Life; 生活の質) の回復が目標であり¹⁷⁾、機能障害・ADL改善度、入院日数、重症例の受け入れなどでその質が評価される¹⁸⁾。また、回復期リハ病棟入院料の施設基準の要件の一つにはFIM (Functional Independent Measure; 機能的自立度評価法) 利得がある。そのため、機能障害やADLの改善、FIM利得につながるリハの提供が重要視されている。

回復期リハ病棟で求められる役割と作業療法士の専門性は不一致が生じる可能性があると言える。作業療法士が扱う作業は、対象者の個別的な経験に基づいており、個別性の

高いものである。作業は健康に不可欠であり、作業療法士は作業を通じて健康に寄与する専門職である⁸⁾という作業療法の原則に従って実践しようとする際には、ADLの改善度やFIMの得点などのように画一的に測定できる定量的な成果ではなく、個別的で定性的な成果が重要になる場合もある。

B氏は「求められる成果と作業療法士として重視する支援の不一致」を感じており、施設から求められる役割を遂行することの必要性を理解し納得しつつも、対象者の個別性を重視した作業療法士としての関わりの必要性を感じていた。

2. 理解されない作業療法の専門性

作業療法士自身が考える作業療法の役割と、他者から期待される役割には不一致が生じる可能性がある。一般市民を対象にした作業療法の認知度調査では、作業療法に対する認知度は低い¹⁹⁾ことが指摘されている。それに加えて、作業療法士自身も作業を基盤にした作業療法実践に対する理解が不十分である^{10,11,12)}とされており、他職種においてはその理解がさらに不十分であることが推察される。そのため、対象者や他職種から期待される作業療法の役割と、作業療法士自身が担いたいと考えている役割で不一致が生じる場面が生じうると考えられる。

作業療法士が大切にしている作業には、対象者個人のさまざまな状況的背景が含まれている。厚生労働省医政局長の通知²⁰⁾では、「移動、食事、排泄、入浴等の日常生活活動に関するADL訓練」「家事、外出等のIADL (Instrumental Activities of Daily Living; 手段的日常生活動作) 訓練」などが作業療法の範囲であると定められている。しかし、作業療法士は、作業の観察可能な客観的側面だけでなく、主観的な作業の意味²¹⁾を捉えることを重要視しており、作業療法の範囲として定められているADLやIADLなどの対象者全員に共通する画一的な作業の捉え方でなく、各個人の経験に基づいた作業を取り扱っている。

A氏は、「作業の日常性による専門性の理解しにくさ」を経験しており、提案する作業に対して対象者がその作業を実現することの意味や健康に与える影響について理解するに至らず、日常にある当たり前のものとして捉えられることで意見の相違が生じることを経験している。また、医療機関は専門的な治療を受けられる場であるという認識が、対象者が日常性のある作業を扱うことに対する理解のしにくさの一因になっていると考えられる。

B氏においては「求められる多様な役割による専門性の揺らぎ」を感じており、他職種から作業療法士の専門的な視点の理解が得られていないため、作業療法士としての役割と求められる役割との不一致が実践の困難さにつながっている。

3. 応えられない作業ニーズ

作業療法の専門性を活かした実践をするためには作業のニーズに丁寧に応えることが重要である。作業療法は、前述のように専門性の理解が難しいため、初回の面接などで作業療法について対象者に説明し、日常の課題である作業を共に解決していく姿勢が重要である²²⁾。

急性期リハにおいて、早期に作業療法士が関わる必要性がある²³⁾ことは明らかである。しかし、急性期リハでは疾患管理が優先されるため、十分なリスク管理を行った上で作業療法を実施する必要がある。A氏は、治療が優先されることにより、作業療法で扱う課題

が制限されていると感じている。A氏は、「必要な医学管理により応えられない作業ニーズ」があると感じており、作業療法の専門性を活かした実践をするために作業のニーズに応じていくことが必要だが、それが困難であると述べている。

これまで研究協力者2名の語りに基づいた分析を行ない、医療機関における作業療法実践が様々な制約により困難さを伴う可能性があることが示唆された。しかし一方で、作業療法を推進することによって、医学に貢献できる可能性もあると考えられる。日本リハ医学会は、リハ医学を「活動を育む医学」と定義している。ヒトの営みの基本である「活動」に着目し、その賦活化を図り、より良いADL・QOLを目指す過程をリハ医学とするという考え方²⁴⁾は、作業療法士が大切にしている作業という概念と密接に関連しているといえる。今後さらに、医療機関における作業療法が、どのようにその専門性を活かしていくことができるかを追求していくことが必要である。

【おわりに】

医療機関で働く作業療法士2名へのインタビューを実施した結果、「医療制度によって受ける制約」「理解されない作業療法の専門性」「応えられない作業ニーズ」といった作業療法実践の困難さを経験していたことが明らかになった。これらの困難さは、医療に関連する制度や医療機関が担っている役割に起因しており、作業療法の専門性を活かした実践をすることの困難さがあることが示唆された。

本研究での研究協力者は2名であり、医療機関で働く作業療法士が感じている実践の困難さを十分に反映しているとは言い難い。あくまで2名の主観的な経験を抽出したものであるため、今後は研究協力者を増やし、多領域に渡る作業療法士のデータを蓄積していくことが重要である。

【文献】

- 1) 一般社団法人 日本作業療法士協会 総務部：協会活動資料—2023年度日本作業療法士協会会員統計資料。日作療士協会誌。2024；第150号：26。
- 2) 大嶋伸雄，都竹淳也，都竹信也ほか：全ての小中学校に「学校作業療法」 飛騨市の挑戦が未来を照らす。クリエイツかもがわ，京都，2024，pp.58-86。
- 3) 一般社団法人 日本作業療法士協会。司法領域の作業療法。
<https://www.jaot.or.jp/member/pickup/detail/275/> (参照 2024-12-23)。
- 4) 永田勝太郎：全人的医療の歴史と展望。全人的医療。2019；17(1)：1-7。
- 5) 中井吉英：私の全人的医療学。心身医。2006；46(2)：119-126。
- 6) 安西英雄：患者中心の医療 米国流「全人的医療」への道。全人的医療。2017；16(1)：22-32。
- 7) 川本隆史：ケアの社会倫理学 医療・看護・介護・教育をつなぐ。有斐閣，東京，2005，pp. 82-85。
- 8) World Federation of Occupational Therapists. About Occupational Therapy.
<https://wfot.org/about/about-occupational-therapy> (参照 2024-12-23)。
- 9) Anne G. Fisher, Abbey Marterella : Powerful Practice: A Model for Authentic

Occupational Therapy. Center for Innovative OT Solutions, USA, pp. 16-18.

- 10) 佐々木剛, 新泉一美, 春口麻衣ほか:「作業に根ざした実践」の現状調査と関連要因の検討. 作業療法. 2024 ; 43(1) : 51-60.
- 11) 清水一輝:回復期リハビリテーション病棟における「クライアントにとって意味のある作業に焦点を当てた実践」の現状と課題. 愛知医療学院短期大学紀要. 2018 ; 9 : 9-17.
- 12) 林映見, 林原千夏, 野呂奈々穂ほか:「作業に焦点を当てた実践」の現状と障壁. 日臨作業研. 2019 ; 6 : 38-45.
- 13) グレッグ美鈴: 第IV章 [1] 質的記述的研究, よくわかる 質的研究の進め方・まとめ方 看護研究のエキスパートを目指して. グレッグ美鈴, 麻原きよみ, 横山美江 (編), 医歯薬出版, 東京, 2012, pp. 54-72.
- 14) 萩原喜茂: 作業療法診療報酬の30年と今後. 作療ジャーナル. 1996 ; 30(9) : 749-754.
- 15) 大村潤四郎: リハビリテーション診療報酬改正経過とその背景. 理療と作療. 1980 ; 14(2) : 81-85.
- 16) 石川誠, 水落和也, 川手信行ほか: 日本リハビリテーション医学会研修施設における療法士数の実態調査. Jpn J Rehabil Med. 2014 ; 51(7) : 405-407.
- 17) 久保俊一, 三上靖夫: 回復期のリハビリテーション医学・医療テキスト. 医学書院, 東京, 2020, p. 9.
- 18) 渡邊進: 回復期リハビリテーション病棟の現況と課題. Jpn J Rehabil Med. 2009 ; 46(12) : 799-807.
- 19) 澤田辰徳, 建木健, 藤田さより, 小川真寛 作業療法の認知度一般市民における「作業療法」, 「リハビリテーション」についての認知度調査. 作業療法. 2011 ; 30(2) : 167-178.
- 20) 厚生労働省: 医政発 0430 第1号 医療スタッフの協働・連携によるチーム医療の推進について. <https://www.mhlw.go.jp/shingi/2010/05/dl/s0512-6h.pdf>(参照 2024-12-23).
- 21) 吉川ひろみ: 「作業」ってなんだろう 作業科学入門 第1版. 医歯薬出版, 東京, 2008, p.8.
- 22) 齋藤佑樹, 上江洲聖: 作業療法の曖昧さを引き受けるということ. 医学書院, 東京, 2023, pp. 156-165.
- 23) 脳卒中学会 脳卒中ガイドライン委員会: 脳卒中治療ガイドライン 2021 第1版, 共和企画, 東京, 2021, pp. 4-5.
- 24) 久保俊一: リハビリテーション医学・医療コアテキスト第2版. 一般社団法人 日本リハビリテーション医学教育推進機構, 公益社団法人 日本リハビリテーション医学会監修. 医学書院, 東京, 2022, p. 3.

高齢者は馴染みのない作業に取り組むとき
模様や色をどのように選択しどのような思いを込めるのか

加藤 真夕美 外倉 由之 清水 一輝

愛知医療学院短期大学 リハビリテーション学科 作業療法学専攻

How do elderly individuals choose patterns and colors, and what meanings
do they assign to them when engaging in unfamiliar activities?

Kato Mayumi Tokura Yoshiyuki Shimizu Kazuki

【要旨】

高齢者が革細工という馴染みのない作業を行う際に、どのように模様や色を選択しているのか、選択動機には一定の傾向があるのかを分析することを目的として、高齢者大学の受講生 24 名が革細工プログラム終了後に作成した振り返りレポートを分析した。革細工は 23 名が初めて体験する作業であった。模様や色の選択には半数以上の対象者が、当日目の前に提示された刻印や染料を見たり、見本を参考にしたり、他者の作品を参考にして構想を膨らませていた。更に 20 名は模様や色の選択、作品に込めた思いを自由記載欄に記しており、KJ 法により選択動機が 7 大カテゴリー、16 小カテゴリーに分類された。多くの高齢者が作品作りを通して、未来の自分に向けて今の自分を表現し記録しようとしたり、目の前の素材や道具を最大限に生かしイメージを具現化しようとしたり、社会と繋がろうとしていることが明らかとなった。

キーワード：介護予防 革細工 選択動機 作業療法

【はじめに】

1. 人が作業しようとする時に必要な要素

Gary Kielhofner は、人が「どのように作業を選択し、組み立て、行うのかを説明する概念」として意思・習慣化・遂行能力の 3 つの構成要素が相互に関係し合うという人間作業モデルを示している。人がその作業が重要と思えるか（価値）、自分の能力を有効と思えるか（個人的原因帰属）、楽しみを見出せるか（興味）が、何かをし始めようとする（意思）ときには重要だと説く。更に作業しながら可能性や期待を「予測」し、行うか否かを「選択」し、面白いか否かという「経験」をし、その作業がどのような意味をもつかという「解釈」をするというサイクルを繰り返しながら、作業に対する意思を変容させていく¹⁾。

加齢に伴い身体機能が低下する中で、以前できていたことができなくなり、意欲や自信が低下し、運動機会や知的活動が減少した結果、更に運動機能や知的機能が低下するという悪循環をきたす可能性がある²⁾。この悪循環を断ち切る作業療法支援の一助とすべく、高齢者が何かをしようとする時にはどのような意思が働くのか、模様選択と色選択という一部の作業工程に関わる動機に焦点を当てて検証した。

2. 介護予防事業・革細工プログラムの取り組み

愛知医療学院短期大学（以下、本学）では清須市との官学連携事業として高齢者大学である「清須市民げんき大学（以下、げんき大学）」を実施している。げんき大学は、清須市の一般介護予防事業（介護予防普及啓発事業）として平成29年度より開講し、令和6年度で第8期生を迎えた。げんき大学設立の趣旨は「健康や介護予防に関する知識を広げ、運動を通して日常的に健康づくりを進めるとともに、新しい出会いや発見、感動を分かち合えること」を目指すことであり、将来的には地域活動の中心的役割を担える人材の育成を目標に掲げている。

本学作業療法学専攻教員（以下、OT教員）は、げんき大学の企画・運営から各プログラムの実施に至るまで、様々に関わっている³⁾。その中の1つの取り組みが、げんき大学生に対する革細工プログラムである。「心身機能を高めるものづくり～革細工を楽しもう～」と題し、作業の有効性を馴染みのないActivityの実践を通して理解することを目的に、革細工を行っている。げんき大学生は、既に裁断と床面処理の済んだ牛革を用いて、60分間で図柄の計画、打刻印、染色の3工程を体験する。1テーブルに4～5名が向き合う形で座り、雑談しながら作業を進める（図1）。OT教員は流れや注意点を解説し、全体を見回りフォローアップする役割を担う。また本学作業療法学専攻2年次の学生を各テーブルに1名ずつ割当て、げんき大学生のサポートをしてもらっている。

なお、本プログラム開始の4週間前には実施概要を説明し、完成作品数種類を見本としてげんき大学生に提示している。事前に刻印や染料の見本提示はしていない。



図1 革細工実施当日の一場面

プログラム中に打刻印と染色が終了した作品（図2）は、OT教員が後日レザーコートの塗布とバネホックの取り付けを行い、三角財布として成型する（図3）。三角財布は、革細工プログラムの日から約1ヶ月後にOT教員がラッピングしてクリスマスプレゼントとしてげんき大学生に手渡すのが通例である。

げんき大学生に対しては、革細工プログラム終了時に振り返りレポートを課している。模様や色を選択した理由や作品に込めた思い、革細工という作業が心身機能にどのような影響を与えそうかなどについて自己分析を試みることで、介護予防対策としての作業の有用性への気づきを促すことが目的である。このレポート記載の目的をげんき大学生に伝えた上で配布し、2週間後に提出期限を設定している。



図2 打刻印，染色が完了した作品



図3 完成した革の三角財布 (25名分)

3. 高齢者が作業を行う際の選択動機として予測されるもの

今回は前述したレポートの一部を分析し、げんき大学生が革細工を行う際に、どのような思いを込めて模様や色を選択しているのかについて検証した。

谷合⁴⁾は、革細工における精神的側面への治療効果として計画性と創造性の育成、判断力・集中力・耐久力などの改善を挙げている。創造性の育成は、「図案の選定や考案、染色方法など」種々の選択過程を通して、興味・予測・選択・解釈の要素を満たす作業であり、今回の検証に相応しい作業工程であると考えた。

一方で本家ら⁵⁾が開発した高齢者版・余暇活動の楽しさ評価法 (The Japanese Elderly version of Leisure Activity Enjoyment Scale ; 以下 LAES) は、「過去の余暇活動の楽しさを詳細に把握できる」⁶⁾ 評価法であり、作業の楽しさを「過去・現在・未来に思いを広げる楽しさ」「人と関わる楽しさ」「考える楽しさ」「達成感による楽しさ」の4つの構成要素に分類したものである。これらは Kielhofner が唱えた意思の3要素である価値・個人的原因帰属・興味を満たすものであり、今回調査する選択動機にこの4つの構成要素に類似したものが含まれると仮説を立てた。

【目的】

高齢者が革細工という馴染みのない作業を行う際に、どのように模様や色を選択しているのか、選択動機には一定の傾向があるのかを分析することを目的とする。

【対象】

令和6年度にげんき大学に入学した高齢者25名のうち、振り返りレポートを提出し、かつ本研究に同意した24名(回収率96%)を対象とした。24名の革細工を実施した当日時点の年齢内訳は、60歳代4名、70歳代17名、80歳代3名(平均73.3±4.5歳)であった。

【方法】

1. 研究方法

自記式のアンケート（振り返りレポート）を用いた調査研究とした。なお本研究は、本学の研究倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号 24011）。

2. アンケート内容

アンケート（振り返りレポート）は、A3用紙1枚の裏表に6つの設問を掲載し、回答リストからの選択や自由記載を求めるものである。今回はそのうち以下の4問を分析対象とした。設問と選択肢は以下の通りである。

A. 革細工は初めてですか？（いずれか1つに☑）

- はじめて
- 過去に数回（1～3回程度）体験したことがある
- 過去に趣味や習い事などで、一定期間行っていたことがある
- 現在、趣味や習い事で行っている
- その他（自由記載欄）

B. 本日の模様（刻印の種類と配置）は、どのように決定されましたか？

（該当するものすべてに☑）

- 先月のげんき大学で見本を見てから本日までの間、構想を練ってきた
- 目の前の刻印の種類を見て、ひらめいた
- 展示されていた見本を参考にした
- 周囲の人が作成している作品を参考にした
- その他（自由記載欄）

C. 本日の色は、どのように決定されましたか？（該当するものすべてに☑）

- 先月のげんき大学で見本を見てから本日までの間、構想を練ってきた
- 染料の種類を見て、ひらめいた
- 展示されていた見本を参考にした
- 周囲の人が作成している作品を参考にした
- その他（自由記載欄）

D. 本日作成された作品のテーマや、なぜその模様や色にされたのかなど、作品に込めた思いを教えてください。（自由記載欄）

3. 分析方法

革細工の経験（設問 A）や模様および色の選択動機（設問 B,C）の選択肢については、単純集計を行った。また自由記載欄（設問 A,B,C のその他と、設問 D）については、KJ法^{7,8)}を用いて分類した。

【結果】

1. 革細工の経験（設問 A）

「はじめて」が23名、「過去に数度体験あり」が1名であり、95.8%のげんき大学生にとって革細工は馴染みのない作業であった。

2. 模様の選択動機（設問 B）

模様の選択動機は24名から全41件の回答が得られ、選択割合は図4の通りであった。「先月のげんき大学で見本を見てから本日までの間構想を練ってきた」は0名であったが、1名はその他欄に「前回見本を見せてもらった印象を参考に打刻した」との記述があり、4週間前の記憶も参考にした様子が伺えた。その他欄の自由記載内容は表1に記す。

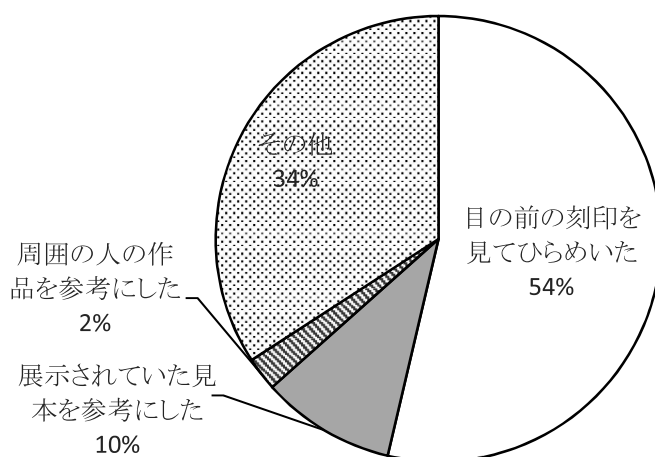


図4 模様を選択動機

3. 色の選択動機 (設問 C)

色の選択動機は22名から全34件の回答が得られ、選択割合は図5の通りであった。「先月のげんき大学で見本を見てから本日までの間構想を練ってきた」は0名であった。その他欄の自由記載内容は表1に記す。

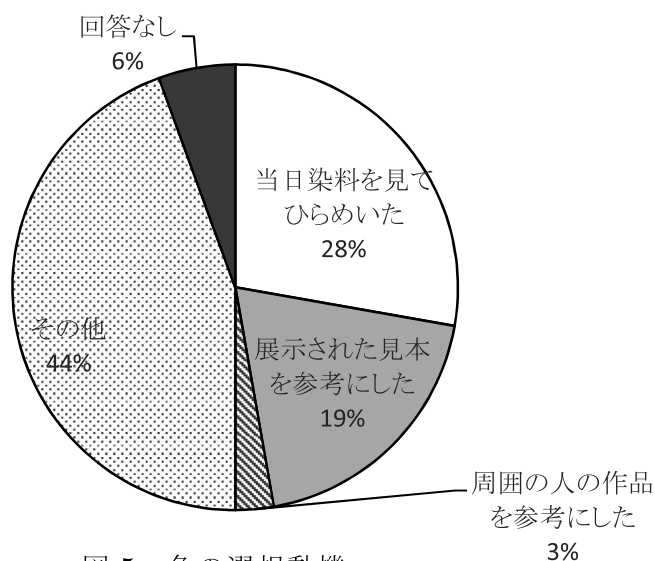


図5 色の選択動機

4. 作品のテーマや作品に込めた思い (設問 A,B,C のその他と, 設問 D)

模様を選択動機、色の選定動機における「その他」に記された自由記載の内容と、設問Dに記されたコメントを抽出した。20名が何らかの自由記載を行った。その結果、模様の選択動機では14件、色の選択動機では16件、作品のテーマや思いでは10件、計40件が抽出された。この40件を、KJ法を用いて類似するカテゴリーに分類した結果、7大カテゴリー、16小カテゴリーに分類された(表1)。

なお、三角財布を家族にプレゼントするつもりだと明記したのは4名であり、プレゼント相手の内訳は、配偶者1名、孫3名であった。

表1 作品のテーマや作品に込めた思い

大カテゴリー	小カテゴリー	自由記載欄のコメント
特別な 思い出	楽しい思い出作り	(柄)面白くして思い出にしたい, (思)大学で見本を見てから楽しみにしていた
	作った日を刻む	(柄)年号を打って思い出にしたい, (柄)いつ作ったかが分かるように日時を打刻した
自分らしい 作品	自分だけのもの	(柄)受講生全員が同じものを作るので自分のフルネームを刻印したかった, (思)自分しか持っていない物を作りたかった
	趣味に合わせて	(柄)私の趣味がガーデニングなので自然に花と葉っぱの模様を選んでいた, (柄)好きな蝶をワンポイントで
	自分が好きな色	(色)好きな色, (色)海の色が好きなのでブルーにした, (色)自分の好きな色にした, (色)好きな黄色系を選んだ, (色)藍色と黄色と迷ったが好きな色に決めた, (色)オレンジが好きだから. 温かいイメージがある
	自分の属性に合わせて	(色)自分の生まれ月のラッキーカラー, (思)自分で使おうと思っラッキーカラーで作った
全体の印象	模様の統一感	(柄)表に花柄っぽくしてみた, (柄)かわいらしい模様にした, (柄)模様はできるだけ大きいものとした
	イメージする世界	(柄)額縁仕立てにしよと思ったが少しイメージが違った, (思)青空をイメージした, (思)作品のテーマはシンプルに可愛らしさを出したかった
	使用時を頭に描いて	(色)使いやすいように目立つ色合いを重視, (色)かばんの中でも目立つ色
素材の特性 に合わせて	革に合わせて	(色)色は革自体がきれいだったのでその色を生かした薄い鮮黄とした
	刻印に合わせて	(色)刻印に合うと思った, (色)刻印に星と月を選んだので夜空のイメージで空色を塗った
ひらめき	何となく	(柄)何となく可愛かったから
妥協	探したけれど	(柄)刻印がなかった. あった刻印で作った, (色)自分の色がなかった
プレゼント相手 を思って	相手の好み がわかるから	(柄)ハート模様ならきっと喜んでくれると思った, (色)夫の好きな色 (色)孫の好きな色. ピンクならきっと喜んでくれると思った, (思)孫にプレゼントしようと思って好きそうなものにした, (思)夫へのプレゼント, (思)孫にプレゼントしようと思った. 絵の好きな孫なので気に入ってくれると嬉しい, (思)小学校5年生の孫にプレゼントしようと思った
	相手の属性 にふさわしく	(柄)男性なのであっさり柄にした, (色)女の子なのでピンクにした
	祈りを込めて	(思)家族の「和・愛・幸せ」を込めて選んだ

(柄)は模様の, (色)は色の, (思)は作品のテーマや込めた思いの自由記載から抽出したことを示す。

【考察】

表1で分類した大カテゴリーについて、更にカテゴリー化を試みると、模様や色の選択動機には3つの傾向があることが見えてくる(図6)。

1つ目は、「特別な思い出」「自分らしい作品」の2大カテゴリーであり、思い出作りや自分の趣向に合わせた作品作りが主であり、「未来の自分に向けて、今の自分を表現し記録しようとする動機」と言える。これは人間作業モデルにおける価値や興味に基づく動機であり、LAESの過去・現在・未来に思いを広げる楽しさに相当すると考えられる。

2つ目は、「全体の印象」「素材の特性に合わせて」「ひらめき」「妥協」の4大カテゴリーであり、目の前に用意されたものから思い描くイメージや直感を頼りに作品作りの動機となっており、「目の前の素材や道具から着想を得て、最大限に生かし、イメージを具現化しようとする動機」と言える。これは人間作業モデルにおける個人的原因帰属や価値に基づく動機であり、LAESの考える楽しさや達成感による楽しさに相当すると考えられる。

そして3つ目は、「プレゼント相手を思って」の1大カテゴリーであり、「作品作りを通して社会とつながろうとする動機」と言える。人間作業モデルの個人的原因帰属(自分は相手の好みを知っている)と価値に基づく動機であり、LAESの人と関わる楽しさに相当すると考えられる。

以上より、高齢者は馴染みのない革細工という作業の模様や色を選択する工程において、自分を表現し、目の前の素材を最大限に生かし、人と関わり社会と繋がろうとするなど、馴染みのある作業と共通する選択動機を持って臨んだことが示唆された。

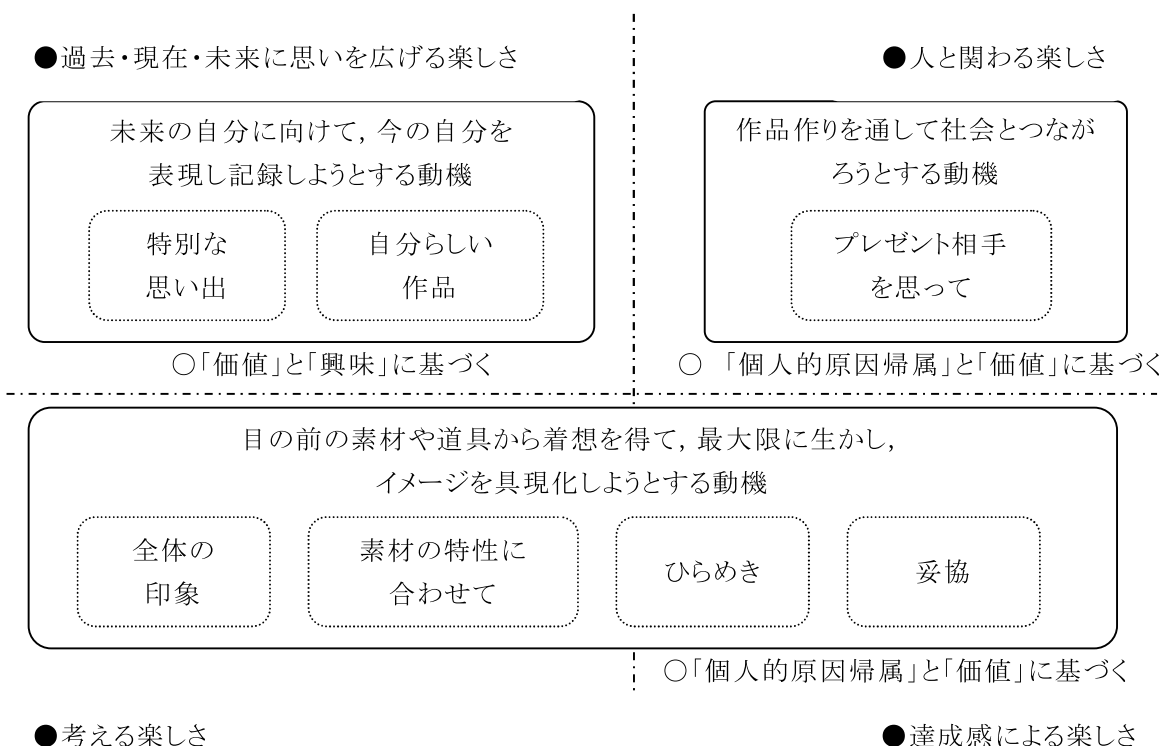


図6 模様や色の選択動機

表1の大カテゴリーを更にカテゴリー分けし、LAESの4つの構成要素(図中●)および人間作業モデルの意思の3つの構成要素(図中○)との関連性を図示した。

【おわりに】

作業療法士は、治療手段の一環として手工芸を活用することがある。Beth P.Velde⁹⁾ は、手工芸によって「人は社会ルールの制約から逃れ、自己の内面的感覚を表現することができ」、「工芸作品が、感情や願望、理想の、自己と他者に了解可能な表現になるとき、工芸はいくぶんかことばとして作用するようになる」と述べている。作業療法士が対象者に作業プログラムを提供する時、対象者が自分らしさを表出し、社会と繋がろうとする動機を適切に引き出すことができ、生活意欲が高まるような仕掛けづくりが望まれる。

【謝辞】

振り返りレポートを丁寧に記入し、かつ研究利用することに同意いただいた令和6年度清須市民げんき大学生の皆様、並びに革細工プログラムを充実したものになるようサポートして下さった本学作業療法学専攻5名の学生諸氏に、心より感謝申し上げます。

【文献】

- 1) Renee R.Taylor(編著), 山田孝(監訳): 人間作業モデルー理論と応用ー改訂第5版. 協同医書, 東京, 2019, pp.12-27.
- 2) 勝山しおり: 高齢期の一般的特徴, 標準作業療法学専門分野高齢期作業療法学. 松房敏則(監), 医学書院, 東京, 2024, p.48.
- 3) 加藤真夕美, 清水一輝, 外倉由之ほか: 作業療法教員が地域の介護予防事業に関わることの意義. 愛知医療学院短期大学紀要. 2024; 15: 16-24.
- 4) 谷合義旦: 革細工, つくる・あそぶを治療にいかす作業活動実習マニュアル第2版. 古川宏(監), 医歯薬出版, 東京, 2018, p50.
- 5) Honke T, Yamada T, Ishii Y, Kobayashi N: Reliability and validity of the Japanese Elderly version of Leisure Activity Enjoyment Scale. The Journal of Japan Academy of Health Sciences. 2016; 19(3): 129-139.
- 6) 本家寿洋: 高齢者への楽しさの実践ー楽しさは高齢者が生きていくうえでの最強の概念であるー. 作業行動研. 2020; 24(1), 1-5.
- 7) 川喜田二郎: 発想法. 中央公論新社, 東京, 1967.
- 8) 川喜田二郎: 続・発想法. 中央公論新社, 東京, 1970.
- 9) Beth P.Velde(野村恵子訳): 工芸からの教え, フィドラーのアクティビティ論ー現実とシンボル. Gail S.Fidler, Beth P.Velde (鈴木明子監訳), 医学書院, 東京, 2007, p.101.

小学生における姿勢の現状と姿勢改善を目的とした講義前後の即時的な変化

齊藤 誠

愛知医療学院短期大学 リハビリテーション学科 理学療法学専攻

Current status of posture in elementary school students and immediate changes before and after instruction

Saito Makoto

【要旨】

近年、小学生児童の姿勢悪化が懸念されており、一説には児童の80%以上が不良姿勢であったとする報告もある。不良姿勢は体力向上が阻害される危険性も指摘されており、健全な身体機能の発達のためにも、姿勢を改善させることは重要である。筆者は小学校において姿勢改善に関する出前講義を実施しており、その講義に参加した児童を対象として姿勢の現状把握と出前講義の即時的な改善効果を検証した。結果として不良姿勢である児童の割合は62%と高く、講義による姿勢改善については一定の効果が認められた。二次元的な画像により姿勢を分類した点に留意する必要があるが、本研究により児童に対する姿勢改善教育の必要性と有効性が示唆されたと考える。

キーワード：小学生 姿勢 画像解析 姿勢改善指導 出前講義

【はじめに】

子供の体力と姿勢との間に関連があると指摘されている。いわゆる猫背姿勢では横隔膜の十分な収縮を得られないことで持久性の低下につながる可能性や、身体制御機能が不十分となりバランス能力が低下することで体力向上が阻害される可能性を示唆している報告がある¹⁾。実際に小学生において良い姿勢であるほど1日の身体活動量が多い傾向にあるという報告²⁾や、姿勢を解析した結果、80%以上が不良姿勢であったとする報告³⁾もあり、健全な身体機能の発達のためにも、姿勢を改善させることは有効である。

愛知医療学院短期大学(以下、本学)では、毎年近隣の小学校から出前講義の依頼を受けている。筆者らは、昨年度より近隣の小学校に対して「良い姿勢って何? 良い姿勢になるためには」というテーマで姿勢改善を目的とした60分程度の講義を実施している。前述の通り、近年では不良姿勢の小学生児童が多くいることが報告されており、本学が実施する出前講義の対象となる児童においても不良姿勢である者が多い可能性が考えられ、姿勢改善指導を行う必要性は高いと思われる。姿勢改善指導については、児童に対して自分の姿勢を客観的に評価させるような試みや体幹筋をトレーニングする介入では一定の効果が認められると結論付けた報告^{4,5)}があるが、具体的な介入方法が確立されたとは言い難い。よって筆者が実際に行っている講義の内容についても効果判定することは重要であると考えられる。

以上より本研究は、小学生における姿勢の現状を把握することと、短時間の姿勢改善教育の効果検証を行うことで、今後の小学生に対する健全な身体発育に向けた方策を検討するための一助となることを目的とする。

【対象】

対象は、筆者の出前講義に参加した小学校6年生の児童で、研究参加に関して保護者の同意が得られた児童21名(男児11名, 女児10名)とした。出前講義は対象となる小学校の授業の一環として実施されており、体調不良等により学校を欠席した児童を除く6年生の全児童が出前講義に参加した。対象者の募集にあたっては、小学校の保健主事を通して、事前に研究内容に関する説明文書を全児童に配布し、保護者とともに内容を確認していただいた上で同意書に署名をいただいている。なお、本研究の実施にあたっては愛知医療学院短期大学・愛知医療学院大学研究倫理委員会の承認を得ている(受付番号24023)。

【方法】

まず対象者の静止立位姿勢を撮影した。対象者には体操着を着用した状態で基準点の中心に踵を合わせた立位姿勢を取らせ、側方からデジタルカメラで静止画像を撮影した。対象者が立位姿勢を保持する際には、研究補助者が前方に立ち、対象者の目線の高さに目標物を示して、それを注視するように指示した。その後、60分程度の姿勢改善を目的とする講義を行い、再度、同様の方法にて立位保持姿勢の静止画像を撮影し、画像解析により姿勢に変化があるかを検討した。統計学的解析は、後述の良姿勢群と不良姿勢群について講義前後の割合の変化を χ^2 二乗検定にて分析した。なお有意水準は危険率5%とした。

・立位姿勢の型(以下、姿勢型)の分類

立位姿勢の画像から耳孔, 肩峰, 大転子, 膝蓋骨後面, 外果前方をランドマークとして抽出し, 先行研究³⁾に基づき, 理想型, 軍人型, 後弯・前弯型, 平背型, 後弯・平坦型の5つの姿勢型に分類した(図1)。この分類は, 得られた矢状面の画像とランドマークをもとに理学療法士が実施した。理想型は, すべてのランドマークが一直線上に位置するものと定義した。軍人型はランドマークが一直線上にあるものの, 骨盤前傾位が増強しているものを指す。後弯・前弯型および後弯・平坦型はどちらも頭部および肩のランドマークが前方に偏位している点が共通しているが, 骨盤前傾位が増強している場合を後弯・前弯型, 骨盤後傾位が増強している場合を後弯・平坦型とした。一方, 平背型は頭部が前方に偏位し, 骨盤が前後傾の中間位にある状態とした。

なお, 本研究では, 先行研究³⁾を参考に, 理想型と軍人型を「良姿勢群」と定義し, 後弯・前弯型, 平背型, 後弯・平坦型を「不良姿勢群」として分類した(図1)。

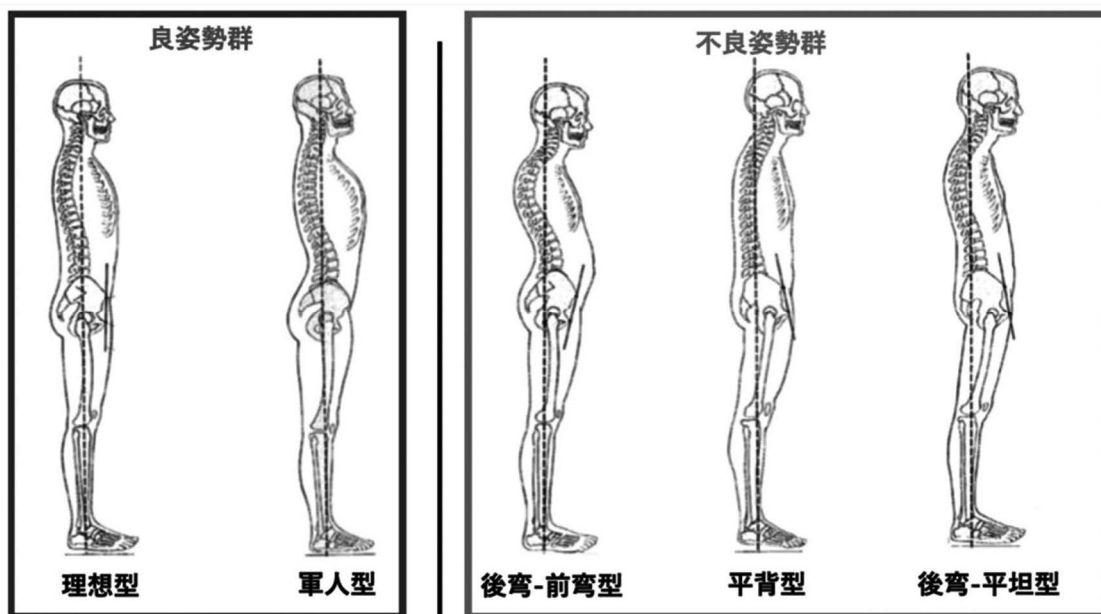


図 1：良姿勢と不良姿勢の分類(文献 3,6 より引用)

・姿勢改善を目的とした講義内容

姿勢改善を目的とした講義として 40 分程度の情報提供と 20 分程度の運動療法を行った。詳細は表 1 に示す通りである。耳垂や肩峰などのランドマークから自分や周りの児童の姿勢を評価できることや、良い姿勢によってバランス機能や瞬発力などの運動機能にも良い影響を与えることなどを情報提供した。運動療法としては体幹筋を中心とした運動指導、体験を行い姿勢の矯正に努めた。

表 1：出前講義の内容

<ul style="list-style-type: none"> 自分の姿勢をチェックしてみよう。 →耳垂、肩峰といった体表面上のランドマークの位置関係をチェックしてもらった。
<ul style="list-style-type: none"> 良い姿勢とは何だろう。どこに注目したらよいでしょう。 →良い姿勢の画像を確認しながら、チェックポイントを指摘した。
<ul style="list-style-type: none"> 良い姿勢でいるとどんな良いことがあるだろう。 →良い姿勢でいることにより生じる身体機能の改善効果を説明した。
<ul style="list-style-type: none"> 周りの人と一緒に姿勢を再チェックして、良い姿勢をとってみよう。 →説明を基に実際に良い姿勢をとるように促した。
<ul style="list-style-type: none"> 良い姿勢になるためにはどんなことが必要だろう。 →体幹周囲筋の重要性などを指摘した。
<ul style="list-style-type: none"> 実際に運動してみよう。 →体幹を中心とした筋力トレーニングを実施した。

【結果】

講義前後の変化を表 2 に示す。出前講義前には、良姿勢であった児童は 21 人中 8 名であり、不良姿勢であった児童は 13 名であったが、講義後には良姿勢 16 名、不良姿勢 5 名と良姿勢の児童の割合が 38% から 76% に増加していた。増加割合について χ^2 乗検定を実施した結果、有意差が認められた。

表 2：講義前後の立位姿勢変化

	良姿勢群	不良姿勢群
講義前	8 名 (38%)	13 名 (62%)
講義後	16 名 (76%)	5 名 (24%)

【考察】

本研究でも先行研究³⁾と同様に、不良姿勢となっている小学生が多いことが示唆された。また、即時的ではあるが、出前講義により一定の姿勢改善効果は認められた。本研究で実施した出前講義は、表 1 の通りであり、40 分程度の姿勢チェックと姿勢に関する情報提供と 20 分程度の姿勢改善を目的とした運動の実施をプログラムとしている。運動の内容としては腹横筋を中心とした体幹筋の収縮が得られるような筋力トレーニングを中心に実施した。体幹筋を中心とした運動療法により姿勢が改善することは先行研究⁵⁾によっても明らかにされており、運動療法を含めた講義内容を構成したことが今回の結果につながったのではないかと考えている。児童に対して座位姿勢を改善させるための情報提供を行った先行研究では、一部の児童の姿勢が改善したものの、机にもたれることが多いなど普段の姿勢が著しく悪いと評価される児童には改善効果が期待できない可能性が示唆されており⁴⁾、運動療法を同時に行ったことが良い結果につながったと考えられる。情報提供と運動療法を組み合わせることによる相乗効果については今後、検討が必要であると考えられる。

他方、本研究の限界として二次元的な画像解析を研究者自身によって行っていることでバイアスの混入リスクや撮影の角度によっては正確な姿勢が評価できない可能性が考えられる。正確性を担保するのであれば三次元動作解析装置を用いた方法が望ましいが、この方法は対象児童の耳垂や肩峰、大転子といった姿勢をチェックする上で重要となる指標にマーカーを貼付して、三次元動作解析装置のカメラで撮影する必要がある。児童にマーカーを貼付する時間がかかることや三次元動作解析装置は持ち運びが困難であることから、短時間で大人数のデータを測定することが難しいといった課題がある。近年ではマーカーレスの解析装置や画像解析ソフトなどが開発されており、それらの使用も検討する必要があると思われる。

【おわりに】

本研究は姿勢改善を目的とした情報提供と運動療法を組み合わせた講義が、即時的に児童の姿勢に与える影響について検討した。姿勢の評価方法に課題は認めるが、本学が実施している出前講義に一定の効果が期待されることが示唆された。今後も出前講義活動を継

続いていくことで啓発活動に努めたい。

【謝辞】

研究実施にあたり、ご協力いただきました児童、教職員の皆様に深く感謝申し上げます。

【文献】

- 1) 藤本鎮也, 吉田一也, 佐藤慎一郎ほか: 体幹と理学療法. 理療臨研教. 2013 ; 20(1) : 7-14.
- 2) 厚東芳樹: 小学生における立位姿勢と歩数との関係. 北海道大学大学院教育学研究院紀要. 2018 ; 131 : 145-153.
- 3) 石橋勇司, 木本理可, 塚本未来ほか: 小学生の立位姿勢の型と生活習慣との関連. 藤女子大学 QOL 研究所紀要. 2022 ; 17(1) : 25-33.
- 4) 大対香奈子, 野田航, 横山晃子ほか: 小学 1 年生児童に対する学習時の姿勢改善のための介入パッケージの効果: 学級単位での行動的アプローチの応用. 行動分析学研. 2006 ; 20(1) : 28-39.
- 5) 鈴木康介, 林陵平, 小椋優作: 小学校高学年児童に対する“良い姿勢”を意識づける短距離走指導の効果. 教育医. 2020 ; 66(1) : 31-40.
- 6) 井福裕俊, 中山貴文, 坂本将基ほか: 小学校高学年の立位姿勢とその特徴. 熊本大学教育学部紀要. 2017 ; 66 : 267-272.

[活動報告等]

大学生の小児領域の正課外活動に対する支援の報告と今後の課題

藤本 大介¹⁾ 加藤 真弓²⁾ 浅野 育子³⁾

- 1) 愛知医療学院短期大学 リハビリテーション学科 理学療法学専攻
- 2) 愛知医療学院大学 リハビリテーション学部 リハビリテーション学科 理学療法学専攻
- 3) 清須市障がい児・医療的ケア児を支える会

Report on support and future perspectives for college students' extracurricular activities in the pediatric field

Fujimoto Daisuke Kato Mayumi Asano Ikuko

【要旨】

小児領域の地域イベントへの協力依頼があり、大学生に小児リハビリテーションへの興味・関心を持ってもらうために正課外活動の枠組みとして本活動を企画した。当日は、医療的ケア児や神経発達症を背景に持つ児等に対し学生は各種遊びを提供し、著者らは学生のイベント参加に対する支援を行った。本活動を通して考えられた今後の課題は、1) 小児リハビリテーションに対して学生に情報提供の場をいかに創出することができるか、2) 小児リハビリテーションの対象者と関わる場を創出と、こうした取り組みを紹介する機会を作り出していくこと、が考えられた。また、大学としての正課外活動への取り組みにおける今後の課題は、3) 学生が正課外活動を継続的に取り組める環境を創出する体制を構築できるか、4) 学生が正課外活動に取り組むモチベーションをどのようにしたら育めるかを検討すること、が考えられた。

キーワード：小児リハビリテーション 正課外活動 大学生

【はじめに】

リハビリテーションの主な領域は、脳血管障害、運動器疾患、脊髄損傷、切断、循環器・呼吸器その他内部障害、周術期の身体機能障害、神経筋疾患、悪性腫瘍、スポーツ外傷等、多岐にわたり、その一領域として小児リハビリテーションがある¹⁾。現在、小児リハビリテーションに携わっている理学療法士の正確な人数は明らかにされていないものの、日本理学療法士協会が発表している会員の所属施設をもとに集計すると全会員数 120,553 名のうち 1.3%が小児リハビリテーションに関係する施設に所属しているとされている²⁾。このように小児リハビリテーションは、様々な領域の中では携わっている人数が少ない領域であると言え、コメディカル養成校の学生がどういった領域に興味・関心を持つか、といったことを考える際にも同様の傾向を示すことが想像される。

一方では、小児中核病院・高次機能病院、新生児集中治療室・小児集中治療室での急性期対応においてリハビリテーションは増加傾向にあり、障害の重度化および多様化、障害

を有する児・者の長寿化に伴うコンディショニング，小児期からの生活習慣病予防，神経発達症への対応といったことが求められている³⁾．こういった社会的な要請もあり小児リハビリテーションのニーズは拡大していると考えられている³⁾．

こうした現状において，コメディカル養成校で学ぶ学生に小児リハビリテーションへの興味・関心を持ってもらう取り組みが必要であると考え，正課外活動に着目した．大学では，「知的・専門技術的な教授研究を行う」正課活動と並ぶものとして，「学生生活の環境的条件を調整するとともに，学習体験の具体的な場面に即して，各学生の主体的条件に働きかける教育指導を行うことによって，その人格的形成を総合的に援助する」正課外活動がある⁴⁾．両者の大きな違いとして，正課活動は単位が付与されるのに対し正課外活動は単位が付与されない活動である⁵⁾．

愛知医療学院大学・愛知医療学院短期大学（以下，本学）は，清須市と提携し官学連携事業として65歳以上の高齢者を対象とした清須市民げんき大学を運営している．この事業では各年度で約10カ月間，介護予防に関する内容を学び，健康づくり，介護予防に役立つ運動を実践する機会を提供している．また，本学は附属施設として幼保連携型認定こども園（以下，こども園）がある．本学の学生は，清須市民げんき大学の活動に参加し，活動を支援したり，こども園では体力測定の実施，運動機会の提供，食育への支援等を行っている．さらに，障がい者スポーツに関わる科目ではパラスポーツイベント（競技会，練習会等）へ参加し，障害のある方々と交流する機会を設けている．このように本学では学内の学習にとどまらず様々な世代や特徴を持つ方々と交流が持てる機会を提供し，学生は学内の学習では接することが難しい世代との関わりを持つことができる．これらの活動の特徴的な点は，単位の認定のために出欠が管理されていること，科目において指定回数のパラスポーツイベントへの参加が義務付けられていることであり，正課活動の範疇での取り組みと言える点である．一方，本学における正課外活動は，様々な要因で限定的であると思われる．

このような現状の中，本学が所在する清須市内で「清須市障がい児・医療的ケア児を支える会」を主宰する代表者（共同著者）から著者らに対しイベントへの協力依頼があった．代表者からは，「コメディカル養成校の学生に障害児・者と関わってほしい，支援してほしい」という期待の声をいただいた．その後，イベントに協力する体制を構築するために本学の地域連携室に打診をし，承諾を得て協力機関となった．以上の経緯で，著者らは小児領域の地域イベントに所属する大学の学生とともに参加することとなった．そこで，今回，著者らが本イベントに参加した学生に実施した支援の内容と今後の課題について報告する．

【イベントの概要】

イベントの正式名称：つながるフェスタ in 清須

イベントの趣旨：医療的ケアを必要とする子どもたち，手足に不自由のある子どもたち，重症心身障害のある子どもたち，地域の子どもたちへの健康づくりの場と楽しみを提供する．

イベント日時：2024年9月15日 10時～15時

イベント会場：トヨタハートフルプラザ名古屋

運営団体：（主催）清須市障がい児・医療的ケア児を支える会

(協賛) トヨタハートフルプラザ名古屋, 放課後等デイサービスこくりこ

(後援) 清須市, 清須市教育委員会, 清須市社会福祉協議会, 清須市心身障がい児者福祉協会

(協力) 多機能型児童デイバインド, 放課後等デイサービスいちばんぼし, 本学運営協力者: 120人

イベントブース: ウクレレ演奏・音楽演奏, 災害避難所体験, マジックショー, 福祉ネイル, バイク乗車体験 (児童虐待防止啓蒙活動), 消防車展示, 甲冑の記念撮影, 飲食物の販売, 福祉作業所での生産物の販売, 有資格者による相談コーナー, ボッチャ, パラバルーン遊び, 缶バッジ作り等

来場者数: 135人

【参加学生の当日までの準備】

学生へのイベント参加の周知を学内でのポスター掲示, オンラインツールを通じて行い, Google フォームにて参加学生を募集した. 結果的には, 理学療法学専攻, 作業療法学専攻の1, 2年生10名 (男性1名, 女性9名) から参加の申し出があり, その後, 参加学生同士で顔合わせの機会を設けた (図1).

一方で, イベント主催者と著者らとの間で参加学生の協力可能な担当ブースについて協議し, 学生が担当するブースは「ボッチャ」, 「パラバルーン遊び」, 「缶バッジ作り」となった. ボッチャは, 通常のゲームルールを簡易的にした遊び方と, さらに簡易的に遊べる「ターゲットボッチャ」の2種類の遊び方を採用し, 担当する学生とともに事前練習を行った. パラバルーン遊びは, 保育分野, 感覚統合療法で行われており, 円盤のような大きくカラフルな布を用いて様々な用途で遊べる遊具である. 担当する学生には事前にパラバルーンの使用方法を動画教材や紙媒体を通じて数種類紹介し, 事前練習を行った. 「缶バッジ作り」では, 主催者が準備した缶バッジメーカーを用いてイベント参加者が缶バッジを作ることを支援する役割を担った. 具体的には, イベント参加者が任意の図柄を書き, 学生が缶バッジに挿入可能な大きさにカットし, 缶バッジメーカーで他のパーツとともにプレスする内容を支援した. これらの装置と使用方法について担当学生は事前に確認した.

また, 学生がイベントに参加するにあたり何らかの障害を持っている児と接することに慣れることを目的に児童発達支援・放課後等デイサービスを運営している事業所への見学の機会を設けた. 事業所へ協力の依頼を行うとともに見学希望の学生を募り, 3名の学生が著者らとともに施設へ訪問した. そこでは, 知的発達症や遺伝性疾患の子どもが在籍しており, 学生は当日に通っていた子どもとコミュニケーションを図り, 遊びを通じて触れ合っていた.



図1 参加学生（本人の承諾を得て掲載）

【イベントを通して得られた結果】

当日は医療的ケアを必要としている児，神経発達症，脳性麻痺，デュシェンヌ型筋ジストロフィー症等の小児疾患を背景に持つ児とその家族が来場していた（図2）．これらの背景を持っている来場者に対し，当日参加した学生は9名で自身の担当するブースで能動的に活動をしていた（図3，4，5）．また，想定よりも多くの方が来場され，参加学生は主催者の要請もあり，他のブースを支援したり，受付での案内の補助を行ったり，自身が担当するブースの活動にとどまらず能動的に活動していた．空いた時間には学生は他のブースの様子を見学，体験し，ステージでは音楽に合わせて来場している子どもと触れ合っている様子がみられた．当日の学生の対応についてリスク管理上特に大きな問題が生じることはなかった．

参加学生からの当日の感想としては，「障害を持つ児の家族，兄弟の関わりを見ることができ良かった」，「見学実習よりも近くで児と接することができ楽しかった」，「今まで接する機会がなかった児と触れ合うことができた」，「様々な障害を持った児に注意を払う，気持ちを読み取ることが難しかったが，学びになった」，「授業で習った障害像を実際に見ることができて良かった」，「コミュニケーションに戸惑い，自分から声をかけられなかった」，「重症心身障害児も喜んでることがわかり，学びになった」といったことを聴取した．

また，小児リハビリテーションに対する興味・関心を尋ねたところ，複数名の参加学生からは「子どもが好き」，「小児リハビリテーションに興味がある」，「イベントへの参加により小児リハビリテーションの領域に就職を考えている将来に活かされる」という言があった．一方で，「高齢者へのリハビリテーション以外の道として小児リハビリテーションの領域があることは知らなかったが，今回の活動への参加を通してその楽しさを知った」という意見もあった．

本活動に参加した複数名の学生からは，「楽しかったから今後も参加したい」，「学年を重ねるごとに実際に見えてくるものが変わってくると思うので定期的に参加したい」，「ボランティア活動が好きだから今後も参加したい」という意見があり，本活動に対してポジティブな印象を持っていることが確認できた．

また，正課外活動に対して「楽しみ」，「学び」，「普段関わらない世代との触れ合い」，「将来の職業選択の視野を広げる」，「障害を持つ人との関わり」，「障害を持つ児やその家族との

コミュニケーションを図ること」を求めて参加を検討していることが本活動への参加学生から聴取できた。



図2 イベント当日の様子

(主催団体の浅野様のご厚意により画像提供・本人の承諾を得て掲載)



図3 参加学生の活動の様子 (ポッチャ)

(主催団体の浅野様のご厚意により画像提供・本人の承諾を得て掲載)



図4 参加学生の活動の様子（パラバルーン遊び）
（主催団体の浅野様のご厚意により画像提供・本人の承諾を得て掲載）



図5 参加学生の活動の様子（缶バッジ作り）
（主催団体の浅野様のご厚意により画像提供・本人の承諾を得て掲載）

【今後の課題】

今後の課題として、大学生の小児リハビリテーションへの興味・関心，大学としての正課外活動への取り組みについて記載する。

1. 大学生の小児リハビリテーションへの興味・関心

本活動は小児リハビリテーションのイベントとして学生に参加募集をしていることから，小児リハビリテーションに興味・関心がある学生が集まったと思われる。前述したように小児リハビリテーションは社会的なニーズが高まっているものの実際には携わっている人数が少ない。こうした現状において，コメディカル養成校で学ぶ学生に小児リハビリテーションへの興味を持ってもらう取り組みが必要であると考え，そのための具体的な活動として本活動を企画した。また，当日，福祉分野に携わる方々と交流する中で，著者らの所属大学のようなコメディカル養成校に対して「学生に見てほしい，体験してほしい」という声，理学療法士，作業療法士の必要性の訴えを多くいただいた。さらには，障害児・者

への訪問看護の有償ボランティアを通して学生に学びの場を提供する事業所もあり、福祉分野におけるコメディカル養成校の学生に対する期待は大きい。このため、小児リハビリテーションに対して医療分野だけでなく福祉分野へのコメディカルの人材供給を見据え、学生に情報提供の場をいかに創出することができるかが課題となってくる。この課題に対して、著者らは2024年の大学祭で地域にある就労継続支援事業所の職員とコンタクトをとり、事業所で作成された物品を販売するブースを設けてもらう試みを行った。このように、学生が大学生活の中で小児リハビリテーションの領域を知る機会はその興味・関心を高める上で重要であると考えられる。

また、小児リハビリテーションへの興味・関心が顕在化している学生に対してさらにモチベーションを高めるための取り組みを検討するとともに、当該領域への興味・関心が潜在化している学生に対する当該領域への気づきを喚起するための活動の企画、情報の発信を継続する必要があると考えられる。本活動は単発的なイベントへの参加となったが、小児リハビリテーションの領域において地域からの大学としての関わりへの期待もあり、こうしたニーズをくみ取り、継続的な地域への支援につなげていき、様々な形で学生に参加を促していくことで結果的に学生の小児リハビリテーションへの興味・関心を高めるきっかけになると考える。したがって、本活動を足がかりに学生に対し小児リハビリテーションの対象者と関わるができる場の創出と、こうした取り組みを紹介する機会を作り出していくことが今後の課題と考えられる。

2. 大学としての正課外活動への取り組み

本活動は、コメディカル養成校で学ぶ学生が小児リハビリテーションに興味・関心を持ってもらうために正課外活動の枠組みとして企画した。本活動は、地域団体からの協力依頼により単発的に実現したが、このような活動を継続的な正課外活動に発展させていくことが課題となってくると考える。正課外活動は、大学、教職員の関与がある正課外プロジェクト、ボランティア活動を指す準正課外活動と、大学、教職員の関与がないクラブ・サークル活動、アルバイト、コンテストなどを指す狭義の正課外活動に分類されることが多い⁵⁾。正課外活動における学生への教育的効果を検証する研究は散見され、大学が学生の正課外活動での成長をサポートする重要性が示唆されている⁵⁾。武市ら⁶⁾は、金沢工業大学における準正課外活動の事例を取り上げ、準正課外活動への参加経験の有無によって学業成績と汎用的能力面の比較を行った。その結果、準正課外活動に参加している学生は参加していない学生と比較して学業成績が良い、汎用的能力が高い、ということを明らかにし、準正課外活動への参加が汎用的能力を高めている可能性があること、正課外活動の教育的効果の有効性を示唆した⁶⁾。このように正課外活動は学生の人格的形成を高める手段としても有用であり、大学として学生が正課外活動を継続的に取り組める環境を創出する体制を構築できるかが課題としてあげられる。

正課外活動を考える上で留意すべきことについて考察する。辻⁷⁾は、2002年に文部科学省がボランティア活動やインターンシップ等の活動の単位認定等を積極的に進めることが適当である、という提言を行ったことに対し、こういった活動を正課活動とすることにより、学生がプログラムに参加することへの強制力、拘束力が増すことになり、学生の主体性の低下につながることを予想される、と指摘している。また、長谷川⁸⁾は、大学生

により構成されている学生プロジェクトチームが正課外活動として小中学生に対し理科実験授業を提供することで理科への興味を喚起する取り組みを紹介しており、この活動を通して参加学生の貴重な成長の機会になっていることを報告した。この報告の中で、当該活動で単位が付与されないことに関してアンケートで問うと「単位のためにする内容ではない」、「単位目当ての学生がいると温度差が生じる可能性がある」などの回答が得られ、当該活動に参加する学生は単位取得という外発的動機ではなく、参加者に喜んでもらって満足してもらうことで自分たちの達成感を得たいという内発的動機付けで活動に参加する学生が多いことが述べられている。このような現状において、本活動は学内に向けて参加を任意とする形態で募集の周知を行い、9名の学生が参加した。この参加人数の是非に関わらず、著者らの所属大学においても学生が正課外活動に取り組むモチベーションをどのようにしたら育めるかを検討することが今後の課題と考えられる。

一方で、辻⁷⁾は正課外活動において学生の自主性、主体性に全て委ねると、正課外活動への学生の意識が低くなってしまふことを指摘している。そのため、正課外活動の発展状況に応じて、正課外活動としてどこまで教職員が介入するのか、学生が達成感、満足感を得る活動をどのように提案するのかについて、大学として正課外活動を推進していく際は検討していく必要があると考えられる。

【おわりに】

小児リハビリテーションに興味・関心を持ってもらうために正課外活動の枠組みとして本活動を企画した。本活動を通して現在の学生の特徴を理解し、学生の主体性を喚起できるような正課外活動の在り方を模索していく必要性を考えることができた。大学は社会に貢献する人材の養成に当たるといふ役割を担っており、学生に高い付加価値を身に付けさせた上で卒業生として送り出すことが社会的責任であると述べられている²⁾。本報告により今後の大学としての地域貢献、正課外活動の推進の一助となり、小児リハビリテーションの発展に寄与できることを切望する。

【謝辞】

活動に参加した学生には忙しい中、事前準備や当日の対応に尽力をしてくださり、また率直な意見をくれましたことをこの場を借りて感謝申し上げます。また、今回の地域イベントへの参加に際しご理解ご支援いただいた事業所、清須市障がい児・医療的ケア児を支える会等の全ての皆さまに深く感謝いたします。

【文献】

- 1) 久保俊一，田島文博：人々の活動を育むリハビリテーション医学・医療，総合力がつくりハビリテーション医学・医療テキスト．日本リハビリテーション医学教育推進機構，東京，2021，p. 4.
- 2) 日本理学療法士協会．統計情報 会員の分布．
<https://www.japanpt.or.jp/activity/data/>．（参照 2024-10-27）.
- 3) 木原秀樹：小児リハビリテーションの理学療法の可能性と10年後．理学療法学．2015；42（4）：313-318.

- 4) 文部科学省. 大学における学生生活の充実方策について (報告) ~学生の立場に立った大学づくりを目指して~.
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/012/toushin/000601.htm (参照 2024-10-27).
- 5) 池田めぐみ: 正課外活動の教育効果と今後の研究課題. 工学教育. 2021; 69 (1): 5-10.
- 6) 武市祥司, 金子真由美: 正課外活動の教育効果の体系的な検証の試み: 金沢工業大学の準正課活動の実証研究. 工学教育. 2021; 69 (1): 19-27.
- 7) 辻多聞: 大学生および大学における正課外活動の位置付け. 大学教育. 2019; 16: 17-24.
- 8) 長谷川誠: 大学生の正課外プロジェクト活動を通じた地域教育における連携. 物理教育. 2020; 68 (1): 42-45.

[学生研究]

《卒業研究論文 第15巻 令和六年度》

[理学療法学専攻]

冷え症者に対する足浴がもたらす効果について

新城 祐輔 小倉 翔陽 (指導教員：臼井 晴信)

握力は体重支持指数の代替手段になりうるか

安藤 大武 川口 凌哉 (指導教員：藤本 大介)

主観的な指標を用いた軽運動により近時記憶は向上するのか

市川 鋭亮 高島 愛士 (指導教員：加藤 真弓)

立ち幅跳び主動作筋に対する動的ストレッチングがパフォーマンスに及ぼす影響について

宇野 竜平 (指導教員：齊藤 誠)

目的に応じて選んだ好きな音楽が6分間歩行に与える影響

遠藤 朱華 大原 実侑 (指導教員：加藤 真弓)

呼吸筋活動の有無による長座体前屈の数値と腹直筋の筋活動量の違い

河村 綾音 中村 栞 (指導教員：臼井 晴信)

プッシュアップバーの握り手の方向の違いによる筋活動の変化

小島 早代伽 (指導教員：木村 菜穂子)

肺の左右差は右側臥位と左側臥位の呼吸介助時の一回換気量に影響するのか

小林 梨菜 廣瀬 れみ (指導教員：臼井 晴信)

咀嚼運動の有無が重心動揺に与える影響 —扁平足の有無に着目して—

榊原 昂之伸 (指導教員：濱田 光佑)

股関節屈曲筋力測定時の足部接地が体幹筋群の筋活動に与える影響について

相良 菜々美 神藤 茉奈加 (指導教員：木村 菜穂子)

骨盤最大後傾位と骨盤中間位での脈拍、呼吸数への影響のちがい

進士 園華 長谷川 藍未 (指導教員：臼井 晴信)

筋協調性がSSP評価で動的ストレッチによる効果が見られるか

田中 愛楓 寺尾 美咲 (指導教員：齊藤 誠)

骨盤の傾斜角度の違いが端座位における上肢挙上の筋活動に与える影響

谷 美早紀 (指導教員：濱田 光佑)

香りの強度によって記憶力と注意力に差が出るのか

永野 圭祐 (指導教員：齊藤 誠)

骨盤後傾位での立位姿勢が重心位置および重心動揺に及ぼす影響

西尾 希歩 (指導教員：宮津 真寿美)

タオルギャザートレーニングが足趾把持力に与える影響

—IVES による前脛骨筋の電気刺激に着目して—

西川 輝 (指導教員：濱田 光佑)

股関節の回旋角度が下肢筋力に及ぼす影響 —片脚スクワット動作に着目して—

橋本 将太郎 (指導教員：濱田 光佑)

国際協力活動が理学療法士の自己成長に及ぼす影響

服部 友香 (指導教員：濱田 光佑)

握力測定姿勢・肢位の違いが握力値に及ぼす影響

馬場 大輝 (指導教員：木村 菜穂子)

身体機能認識誤差の大きさの程度と身体活動量の関係について

福澤 綾 (指導教員：加藤 真弓)

股関節外旋筋群とハムストリングスの各ストレッチングが

股関節屈曲角度に与える影響

松葉 和奏 宮澤 千和 (指導教員：松村 仁実)

バスケットボールゲーム時でのポジション別の身体活動量の差

宮邊 魁人 (指導教員：白井 晴信)

ハムストリングスに対する25分の寒冷療法はSLR 角度を変化するのか

八木 美佑 (指導教員：宮津 真寿美)

通常歩行時の歩幅と体重支持指数との関係

山下 日菜 (指導教員：藤本 大介)

マスク・会話の有無による運動時の呼吸, 変化

渡邊 真生 (指導教員：白井 晴信)

頭部前方偏位姿勢と胸鎖乳突筋の関係

奥田 龍人 (指導教員：齊藤 誠)

筋骨格シミュレーションソフトを用いた足関節背屈制限が他関節に及ぼす影響の検討

小田 和香菜 (指導教員：山田 南欧美)

保育士の肩こり・腰痛の実態について ～受け持ち児の年齢に着目して～

神田 圭音 (指導教員：齊藤 誠)

通学における移動負荷が自律神経活動に及ぼす影響

榊原 しずく (指導教員：白井 晴信)

足関節捻挫の有無による側方への片脚着地時の筋活動について

森 彩音 (指導教員：濱田 光佑)

厚底靴着用時のインソールによる足圧の変化

松田 堇 (指導教員：齊藤 誠)

動的ストレッチ後の筋力の経時的変化

桐山 裕加 五百澤 ひより (指導教員：松村 仁実)

運動及び音楽聴取は短期記憶と瞬きにどのような影響をもたらすのか

水野 湧斗 (指導教員：加藤 真弓)

《卒業研究論文 第15巻 令和六年度》

[作業療法学専攻]

回想法を用いて学生間のコミュニケーションは変化するのか

安藤 陽香 澤田 亜木甫 (指導教員：加藤 真夕美)

学生及び防災に関わる方の災害に関するアンケート調査から考えた作業療法士の必要性

石井 優月 神谷 凜 谷口 優奈 (指導教員：廣渡 洋史)

照明の色が記憶力に及ぼす影響

今村 菜々穂 酒井 瑞葵 (指導教員：清水 一輝)

本学学生の自己受容と自我同一性の関連について

大谷 宗椰 (指導教員：横山 剛)

幼児期から大学に至るまでの食べ物の好き嫌いの変化と成績の関係について

奥田 帆乃佳 (指導教員：清水 一輝)

人が感じるジレンマと対人依存欲求の関係性

神谷 茉旺 春田 真友子 (指導教員：横山 剛)

女性の髪色・髪型による印象の違い

熊崎 莉穂 對木 楓 丹羽 凜夏 (指導教員：外倉 由之)

2条件のBGMが、作業効率に及ぼす影響について

佐川 茄睦 龍口 亮大 船橋 昂平 (指導教員：渡邊 豊明)

視聴覚刺激を用いた回想法は活動への動機付けを高めることに有効か

—過去に夢中になった遊びを回想テーマに用いて—

中井 大翔 (指導教員：加藤 真夕美)

発達障害者に対する学校での取り組みについて

吉水 竜彦 (指導教員：清水 一輝)

愛知医療学院大学 紀要投稿規程

総則

1. 本誌は愛知医療学院大学の学術的進歩に寄与する論文等を掲載する。和文名は「愛知医療学院大学紀要」、英文名は「Bulletin of AICHI Medical College of Rehabilitation」とする。
2. 本誌は愛知医療学院大学の紀要編集小委員会が編集する。
3. 投稿は原則として愛知医療学院大学及び愛知医療学院短期大学所属の教職員（専任・非常勤等を問わない）、専攻科学生、研究生に限る。ただし、それ以外の投稿も紀要編集小委員会の判断によって受理できる。
4. 投稿原稿の種別は原則として、原著、短報、症例報告、総説とする。ただし、活動報告、調査報告等も論文に準じた形式で投稿できる。なお、専攻科学生及び研究生の研究は、論文形式で掲載できる。
5. 論文形式での投稿原稿は他誌に未発表のものに限る。原著、短報、症例報告、総説の投稿論文の審査は査読制とし、種別の変更及び採否は編集小委員会において最終決定する。必要に応じて誓約書・同意書などを貼付する。
6. 掲載された論文等の著作権は、愛知医療学院大学に帰属する。愛知医療学院大学は掲載論文を電子化または複製の形態等で公開・配布する権利を有するものとする。

原稿作成の手引き

1. 本文の長さは原著など論文形式での投稿の場合、400字原稿用紙20枚分（8000字）以内とする（一般的に英文は和文原稿用紙2マスに3文字となる）。和文原稿は10.5ポイント、英文は12ポイント、MS明朝を用いたMicrosoft社のWordで作成し、PDFに変換したものを提出する。
*和文の句点と読点は次に統一する。句点：全角ピリオド（.）読点：全角カンマ（,）。
*英数字は半角とし、フォントはCenturyで統一する。
2. 和文原稿は、A4用紙縦置きにして40文字×40行とし、余白を、上35mm、下30mm、左右25mmとする。英文は、左揃えとし行末のハイフネーションは用いない。
3. 図・表・写真は原則として本文中に組み込む。図・写真の下部（表は上部）には、図1などのように番号を記し、スペースを置いて説明をつける。文字・数字は全て本文と同じフォント・サイズにする。なお説明は、図・表に対してセンタリングで配置とする。
4. 論文原稿は以下の順に記述する。
 - ① 和文：題名、著者名、所属、英題名、著者英名の順にそれぞれ改行し、1行空ける。これらは全て12ポイント、本文と同じフォントで太文字とする。著者名の記載は、和・英名ともに姓名の順とし、間に半角スペースを入れ、英名はそれぞれの1文字目を大文字とする。
 - ② 英文：英文題名、英文著者名（全員記載）、英文所属の順にそれぞれ改行し、1行空ける。全て14ポイントとし、いずれも最初の1文字だけ大文字とする。
 - ③ 要旨は1行空けて記述する。和文は400文字以内、英文は250words以内、キーワードは5語以内で全て本文と同じフォント・サイズとする。
 - ④ 本文は1行空けて以下の順に記述する。
(例として以下の言葉を使用する。ただし、内容によっては異なることもある)

- *はじめに *対象と方法（症例と方法） *結果（成績）
- *考察 *おわりに
- *謝辞（科研費等の受理，学術集会等で発表したものはその旨を記載する）
- *文献

いずれも小見出しとして【 】でくくり，和文・英文とも本文と同じポイント，太文字とする．小見出しの前は1行空ける．

5. 略称・略語は初出箇所で正式名称を記し，かっこ付けで略称・略語を付記する．
6. 引用文献の記載について
 - ① 論文の最後に，引用順及び本文に初出の順に番号を付けて記載する．本文中の該当箇所の右肩に数字をつけて表す（例：¹⁾）．
 - ② 著者名は筆頭者から3名まで列記し，それ以上は，ほか または *et.al.*とする．
 - ③ 引用雑誌名は略名とし，日本語文献は「医学中央雑誌収録誌目録」，外国文献は「PubMed」に従い，以下の文献記載例を参照して記載する．
 - *文献記載順序
 - 《雑誌》 著者名：論文タイトル．雑誌略名．出版年（西暦）；巻号数：初頁-終頁．
 - 《書籍》 著者名：書名 版表示（初版は省略）．出版者，出版地，出版年（西暦），pp.（初頁-終頁）またはp.（単頁）．
 - 《論文集（書籍）中の論文》 著者名：論文名，書名．編者名，出版者，出版年（西暦），pp. 初頁-終頁．
 - 《Web上の記事》 ページ作成者名．Webページの題名．URL（参照年月日）．
 - ④ 例
 - 1) 湯田京子，松田啓一：障害者の就労支援 重度・重複障害．総合リハ．2008；36：533-537．
 - 2) Cooper DS, Doherty GM, Haugen BR, et al.: Revised American Thyroid Association management guidelines for patients with thyroid nodules and differentiated thyroid Cancer. *Thyroid*. 2009; 19: 1167-1214.
 - 3) 中村隆一，齋藤宏，長崎浩：基礎運動学 第6版補訂．医歯薬出版，東京，2012，pp. 305-313.
 - 4) 高見博，村井勝：第1章 内分泌外科総論，内分泌外科標準テキスト．村井勝，高見博（編），医学書院，東京，2006，pp. 1-7.
 - 5) 中央教育審議会大学分科会．魅力ある地方大学を実現するための支援の在り方について（令和3年8月 大学分科会）．
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo4/houkoku/1411360_00006.html（参照 2021-12-01）．
7. 投稿原稿（初稿）についてはWord及びPDF形式で保存した2つのデータを提出する．なおPDFデータは，原稿の著者名と所属を白文字にして保存したものとする．
8. レフリーによる査読は1回以上とする．
9. 完成論文についてはWord及びPDF形式で保存した2つのデータを提出する．その際プリントアウトしたものも1部提出する．
10. 原則として投稿（初稿）は毎年度7月1日～11月末を受付期間とする．
11. 本誌は原則として毎年度4月に配布する．

12. この規程は令和6年4月1日より発効とする。

(附則)

この規定は令和6年7月1日に改定し、改めて同日発効とする。

編集後記

本紀要は大学開学に伴い、それまでの愛知医療学院短期大学紀要から愛知医療学院大学紀要と名称を改めました。今年が発行初年度となりましたが、多くの方にご尽力をいただきまして、無事に刊行できましたことを心より御礼申し上げます。

大学開学初年度という慌ただしい中で、投稿論文が集まるかという懸念もございましたが、原著論文1編、短報3編、活動報告1編、合計5編を掲載することができました。来年度以降も愛知医療学院大学の研究活動を発表する場の一つとして貢献できるよう、引き続き編集作業に努めたいと思います。

最後になりましたが学内外からのご指導ご鞭撻をいただき、本紀要が、益々リハビリテーション、セラピストの養成教育などに寄与できますよう祈念しております。今後とも何卒よろしくお願いいたします。

紀要編集小委員会
齊藤 誠

〈紀要編集小委員〉

編集委員

齊藤 誠 (リハビリテーション学科理学療法学専攻)

渡邊 豊明 (リハビリテーション学科作業療法学専攻)

齊藤 寛子 (統括管理部)

愛知医療学院大学紀要

第1号

発行日 令和7年3月31日

発行者 学校法人 佑愛学園

愛知医療学院大学・短期大学

〒452-0931 愛知県清須市一場519

TEL : 052-409-3311

大学HP : <https://www.yuai.ac.jp/>

編集者 愛知医療学院大学紀要編集小委員会

印刷所 株式会社フレアクションワークス